

# 麗澤教育 第一号 〈目次〉

発行のことば	編者	2
写真・麗澤大学近況		4
麗澤教育のめざすもの―「知徳一体」の教育	廣池 幹堂	8
発刊を祝して	大谷 誠之	10
学風を考える	千島 英一	12
麗澤大学の魅力は何か	三潑 正道	17
留学生から見た麗澤大学	朱 春瑟	21
寮生の絆	村松 美幸	24
―歴史回顧―		
初代学長廣池千英先生を想う	谷口 茂	27
麗澤の人	池田 裕	41
美わしく悠久かな「麗澤の園」	秋葉 佳伸	47
―随筆―		
人生にはだれでも「その時」がある	真野 義人	51
いま哲学の意味するもの	大島 末男	56
廣池千九郎の中国観	欠端 實	62
弱さの教育	水野治太郎	68

# 発刊のことば

編者

本誌は、これからの麗澤教育のあり方を探求するための対話の場となるために発刊されました。私たちは、急速に変化する大学環境のなかで、麗澤教育のめざす理念を根底から問う必要に迫られています。ここでいう麗澤教育とは、建学の理念に統合された人間教育の全体像を意味しており、それを一言で表現すれば、真理に目を見開いた深い知恵と慈悲心に基礎づけられた人格を人々が目指すことを通じて、人類が直面する苦難を解決に導こうとするような試みを意味しています。

ところが、この壮大な人間教育の理念が、いま根底からゆさぶられるような状況にあります。変革めまぐるしい社会と大学環境のなかで、つぎつぎと新たな課題が押し寄せており、大学を取り巻く環境は、きわめて多元化し、多様な原

理の共存を求めています。これまでめざしてきた理念を変化させて多様性・多元性へと発展できるのかどうか、それは純粹なものをブレンドするだけなのかどうか。議論はいま始まったばかりです。

さらに具体的でなまなましい課題もあります。大勢の学生諸君が入学したために、若者文化に欠けている躰教育の問題まで持ち込まれてきました。学生諸君のマナーが悪いのは教育効果があつていないのではないかと、いや躰は家庭の責任であつて大学とは無関係なのだという反論、さらには高度の人間教育よりも日常生活に即した教育の方が重要なのではという意見もあります。

このように多様な課題と意見が共存するなかで、いま最も大切なことは、教育に責任をもつ人々の率直で親密な対話で

はないかと思えます。教師はもちろんのこと、教育をうける学生自身も、さらにはそれを支援している家庭の父母や保護者の方々も、そうした教育の有り様に意見を述べていただき、参加していただきたいものだと思います。ことに学生諸君との真剣な対話を希望します。

元来、学生一人ひとりの人間的成長を目標とする麗澤教育の場合には、教える側の取り組み姿勢や熱意を問題視するだけでは十分とはいえません。むしろ学ぶ学生自身が、教えられる内容をどう受けとめ、理解し共感しあるいは反発しているか、その結果自らの内面をいかに豊かに成長させているかを確認するプロセスが大切ですが、従来は、その点が不十分だったように思われます。そのうえ、卒業生が主体的に大学づくりに参加する道も閉ざされていたように思います。今日の大学理念は「教授の大学から学生の大学へ」の転換にあるといわれます。

本学の創立者廣池千九郎博士は、良き教師であったばかりでなく、ここでいうような「共育者」であるという点でも優れた先達でありました。昭和一〇年に本学の前身である「道徳科学専攻塾」を設立したときには、確かに心血を注いで建

設したのですが、しかしそれでいて、ご自身は「自分は病弱ゆえに寝ていてもこの学園ができた」と語っていたのです。つまりこのエピソードから、学園の建設は、師の教えを受けた人々が教えを実践に移した成果であり、それを奉仕のまごころの結晶として、心楽しく受けとめられていた師の心の様子が窺われます。

私たちはこのことから、教育というものは、教えるという能動性と、さらにはその成果を確認する受動性の両者から成り立っていることに気づかされるのです。そこで私たちも今後の麗澤教育のあり方として、学生諸君及び卒業生諸氏の大学活動への主体的な参加と取り組みにも関心をもつべきではないかと思えます。大学もこれまでのように、卒業生諸氏をお客さんとして扱うことはやめて、大学関係者とともに責任を果たすパートナーとして認識しなおすべきであると提言したいと思えます。

将来的には、本誌が年一回から季刊誌となり、また卒業生諸氏にも講読されるようになればと願っています。そのためには関係者のご支援を切望してやみません。

(外国語学部教授 水野治太郎記)



平成6年度入学式

平成5年度卒業記念パーティ（於体育館）

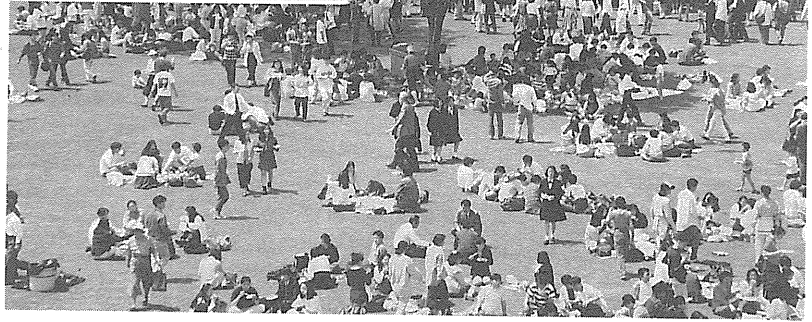






廣池学園すべての関係者が  
集う野外交歓会

挨拶する  
廣池学長



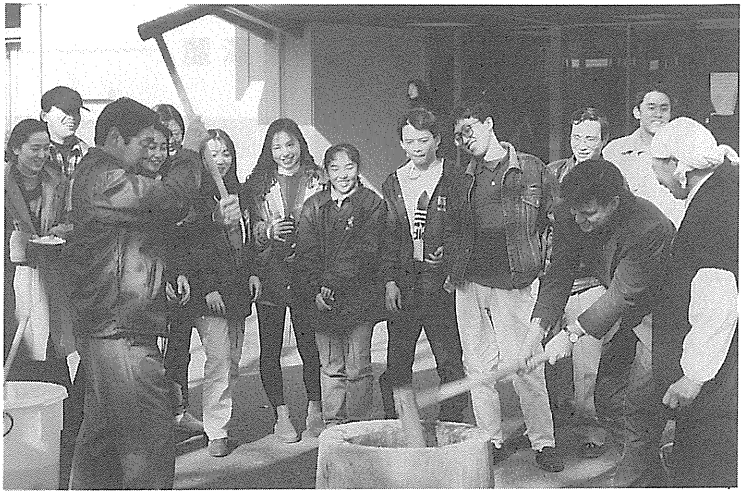
ステージで いざ本番！



第31回麗陵祭の開会



恒例の大もちつき大会—廣池学長  
が腕をふるう



学生との交流風景

犬養道子客員教授の講義





乗馬クラブ発足、満開の桜をバックにお披露目

恒例の学友会・リーダーセミナー



留学生歓迎会



六月四日の記念日に軽音楽部が演奏

# 麗澤教育のめざすもの

学長

廣池 幹堂

## —「知徳一体」の教育—

今年には廣池学園が創立されて六〇周年、人間で言えば還暦という節目の年である。また、若年人口の減少、国際化、情報化の進展という環境下に、学校教育全体が明治時代、戦後に続く第三の教育改革の最中にあり、特に大学は戦後最大の

も「有用にして信用ある実家」の育成をめざしたのである。戦前、戦後を通じて、時代におもねらない本学の「無党無偏」の精神の原点がここにある。

変革期にある。本学も平成四年度に開設した国際経済学部が今年には完成年度となり、平成八年度開設に向けて大学院の設置準備も進められ充実・発展に努めているところである。そこで、建学の精神を確認して今後の麗澤教育を考える材料としたい。

創立者廣池千九郎（一八六六年～一九三八年）は、昭和一〇年（一九三五年）に総合大学設立構想に基づき、本学の前身である「道徳科学専攻塾」を設立した。戦雲立ち込める時代にもかかわらず「知徳一体」の教育理念を掲げた専攻塾は、男女共学、英語教育を実施し、国内のみならず海外において

創立者は、人類の平和と幸福の実現には民族・宗教を超えた普遍的な道徳の確立が不可欠であると考え、畢生の名著『道徳科学の論文』（一九二八年）の中で、人類の遺産とも言うべき東西の聖人の思想をはじめ、当時の発達した諸科学の学際的研究によって「新科学モラロジー」の創建をめざした。『論語』『大学』『孟子』等の中国の古典や、プラトン、アリストテレス、ペスタロッチ等の研究によって、教育の根本原理について考察を深めた創立者は、その論文の中で近世以降の知育偏重教育を厳しく批判している。

「今日、全世界の教育の原理・目的及びその方法の組織は、ただ単に物質を得る方法を教うるのみにして、人間とし

つ (AS MAN) の人間を造ることをば忘れておるの  
であります。」(『道徳科学の論文』八一―七七頁より抜粋)

「大学の道は明徳を明らかにするに在り」(『大学』)、「天爵を修めて人爵これに従う」(『孟子』)や、「富の獲得とか体力の養成とか知性や正義に関係のない単なる才気とかを目的とした教育ではなく、徳の教育こそが教育の名に値する」(『法』)というプラトンの言葉に示されるように、創立者は、人間性を高める教育こそ真に教育の名に値するものであると考え、専攻塾では単なる知識だけではなく全体的な英知(ウイズダム)を身につけた「知徳一体」の人間の育成をめざしたのである。

今日、各界においてモラルの低下が問題となり、いじめや登校拒否の問題もなかなか解決されない現実を見ると、戦後の教育も「知徳一体の教育」「人間として(AS MAN)の人間を造る教育」を忘れてきたと言わざるを得ない。今後ますます情報化、国際化が進む現代社会においては、一層高い人間性、道徳性を培うことが必要であろう。環境問題を引き起こし、生命操作までも可能にした科学技術をコントロールできる人間性、異文化を理解できる柔軟な心、他者(他国)の痛みを感じることができる心を育てていかなければ、二一世紀を真に豊かで平和な時代にすることはできないであろう。

また、進取の気性に富んだ創立者は、教育方法についても常に検討を加えて、その時代の最善の方法を採用し、学生の能力を引き出すことに努力した。創立以来、開架式によって自由に本を見ることができ、現在では最新の設備を整えた図書館には「経をもつて経を説く」(王鳴盛)が掲げられているが、これは注釈によらずに自ら原典にあたる自修法に重きを置いて、学問の基礎を身につけるとともに自ら学び続ける力を養うものであった。創立者は、学生が将来は師を超える人材に育つ「出藍の教育」(『荀子』)をめざしたのである。

このように、心豊かな人間性を育てるとともに各種の専門知識を有し、実践的語学によって国際社会に貢献できる人材の育成をめざす「知徳一体」の教育こそ麗澤教育の根幹であり、本学に学ぶ学生諸君には、高い志、理想を胸に抱き、国内のみならず国際社会で活躍できる実力を大いに養っていただきたいと思っている。遠く海外から本学に学ぶ留学生の皆さんに期待するところも同じである。

麗澤教育の現在があるのは多くの先人、先輩の尽力の賜物であるが、創立者の壮大な教育構想から言えば、その現状は質・量ともに十分なものとは言えないであろう。二一世紀に向けて一層の展開を図るために、本誌において麗澤教育のあり方・内容について大いに議論されることを期待している。

# 発刊を祝して



後援会長 大谷 誠 之

『麗澤教育』発刊おめでとうございます。麗澤大学建学の理念を、学祖廣池千九郎博士は、大学の本質と役割として次の様に述べておられます。大学の本質は、「宇宙自然の法則即ち宇宙の真理を研究し、人類間における最も有用な人間を開発し育成すること」。大学の役割は、「公平な立場で、人類

の眞の生存、発達、安心および幸福享受の原理を追求すると同時に、国民の世論と標準と人類正義の標準を定める最高機関である」と。つまり、「まごころ」を持った「世界に通じる人間：Ladies and Gentlemen」となり、人類の進化発展に役立つ人間となり、世界に羽ばたけ、と学祖は言っておられると思います。

生涯学習が今日広く叫ばれています。私達学生の後援者は、学生達と共に生涯学習していく、というその手始めとし

て、麗澤大学の学祖の建学の理念をしつかりと勉強したいと思います。事の眞偽は分りませんが、先日、福澤諭吉先生の悪口を言っていた慶應大学生が、退学になったという噂を聞いた事があります。学祖を良く知り、尊敬する事が、師弟・後援会会員共々、非常に大切な事と思います。

私は、麗澤大学イギリス語学科を昭和四三年に卒業させて頂き、航空宇宙産業関連の商社に勤務し、海外駐在二〇年を経て、二七年勤務しておりますが、その間、米国、イギリス、オーストラリア、スリランカ、メキシコ、コロンビア、ベネズエラ、韓国等種々の国を訪れ、滞在し、特に感じたのは、文化・習慣は違っても、人間は、皆同じという事でした。学祖は、「モラロジ」の教えを学び、最高道徳の実行をすれば、世界中どこに行っても、どんな人達とも上手くやっていけ、地上天国を造

れる」と言っておられたと聞いています。

学祖が心血を注いで作られ、日々心の持ち方と実践の方法を示された格言を三十一日の「心のカレンダー」にしたものがあります。その英語版である「Morality Day by Day: Thirty - One Guidelines for the Daily Practice of Supreme Morality, A Perpetual Monthly Calendar from The Institute of Moralogy」を外国において、毎朝読みながら、実践に心掛けて来ましたが、外国の沢山の方々にも、このカレンダーを差し上げ、良く理解できると、皆さんに大変喜んで頂きました。学祖が言われたように実践することが出来れば、どこでも地上天国が造れるだろうなあ、と思いました。

学祖は常々、学ぶ事と共に「実践」が大切だと教えておられます。「心のカレンダー」の二四日目に「実行を主として道に聴き途に説かず Practice is more important than listening and talking. — 従来 of 道徳とか、信仰とかいうものは、ただ智的に道徳、もしくは信仰の話を知って、これを他人に対して説いて聴かせるのが主となって居るので、自らその道徳を実行するということが乏しかったのであります。最高道徳は、ただ智的にその原理を知るとか、空しくこれを他人に説明するとかいうだけでなくして、これを聴くと同時に、幾分でも直ちに自らこれを実行するという事になって居る

のであります」とありますように、良い事に積極的に取り組んで行きたいと思えます。

また、この「心のカレンダー」の三十一日目に、「途中には困難ありて最後には必ず勝つ There may be difficulties on the way, but one can always overcome them. — われわれ人間は、過去において意識、もしくは無意識的に、多くの過失及び欠点を積んで居るのであります。それ故に、今、最高道徳の実行を始めても、直ちに幸福になる人もあれど、依然として種々の困難に遭遇する人もあるのです。すでに古来、聖人でさえ種々の困難を嘗められたのでありますから、われわれ尋常人が、途中において困難するのは、当然であります。されば、いかなる事があっても、これに屈せず、最高道徳を継続実行しましたならば、最後には必ず、大なる幸福が生まれて来るのであります」とあります。この格言に励まされ、楽しい海外生活を送れたことを感謝しております。

この『麗澤教育』誌が、在学生、卒業生、後援会会員、学内の教職員、麗澤を支持して下さる皆様等すべての関係者の皆様に「建学の理念」を知って頂くうえで、大いに役立ち、麗澤大学の発展に寄与されますことを心より祈念しております。

# 学風を考える

学生部長  
国際経済学部教授

千 島 英 一

初夏の日差しがまぶしく差し込んでいた去年の5月のある日のことでした。午前の授業が終わり、オフィスで昼食用に持参した弁当を広げていましたら、何人かの学生が先ほどの授業の質問があるとかで入って来ました。一緒に食事をすませ、質問にも答え終わって、ふと外を見ると、新入生を迎え、キャンパスが一段と華やぎ、学生たちのさんざめきが木々の緑にこだましているかのようでした。ある一群は新芽を出そうとしていた芝生に入り、サッカーに興じています。

ギターをかき鳴らし、まるで怒鳴っているだけとしか思えない、いがらっぽい声を張り上げている者もいます。その脇で上半身裸になり、日光浴としゃれこんでいるのもいます。傍らを図書館帰りか、幾冊かの書物をこわきに抱えた女子学生が通っていきます。ほんやりとそんな光景を見ていました

ら、いつの間にか側に来ていたある四年生の女子学生がぼりところ洩らしました。

「私たちが入学した頃に比べて、最近の麗澤大学はなんだから、いづれ別の大学になってしまったようだわ」と。

確かにその通りで、そのことは私自身も常々感じてはいたことでもあったし、教職員の間でもたびたび話題になっていることでもありました。そして、「別の大学になってしまった」というなにげない彼女の感慨がいつまでも私の耳の中でリフレインし、なかなか重たい課題をあたえられたなど、いろいろな思いが頭の中を駆け巡りました。そこで今回、こうして新装なった本誌に発表の機会を与えられましたので、思い切って、学生部長として一年間過ごしてみた感想と、あわせて麗澤大学の現在の姿の一端を綴ってみたいと思いました。



さて、一家に家風が、会社に社風があるように、学校にもそれぞれ特有の学風があります。私立学校法第一条にも「その学風にかんがみ、自主性を重んじ」と私立学校の在り方を規定しているくらいです。学風はいわばその学校の建学の理念が長い年月を経て醸し出されてきたものであるとも言えましょう。であるからこそ、どの大学でもそれを大切に、守っていく努力をしています。したがって学風は、変えようと思ってもなかなか変えられないものの一つでもあるのです。が……。しかし、学風のようなもの、世の中とつぶりとその中につかっていると、見ようとしてもなかなか見えてこないものと同様に、当事者にはなかなかはっきりとは見えてきません。そこで麗澤大学の学風が、世間の人からはいつたどういう風に見られているのか気になりましたので、いろいろと調べてみました。すると思いは通ずるもの、亜細亜大学の衛藤藩吉学長が、『広報アジア』（平成五年一月二五日号）の「学長室便り」という欄で、麗澤大学の学風の一端を語っている記事が目に入ってきました。該紙は亜細亜大学の広報紙という性質上、一般にはなかなか目に触れる機会がないと思いますので、そこでもちょっと長くはなりますが麗澤の学風に触れた部分を引用したいと思います。

最近、広池学園の麗澤大学を訪れた。

やや雨催いの日であったが、電車を乗り継いで常磐線南柏で降り、麗澤に着いたころ雨もあがって、紅葉が色鮮やかであった。

キャンパスには樹木が多く地面は落葉でおおわれ、いかにも秋の暮れを思わせる風情であった。

この大学はモラロジ（道徳科学）研究所と併設されており、廣池千九郎というすぐれた創始者の思想を学風の根幹としている。

この大学とのご縁は三十年近く昔にさかのぼる。学生向けの講演を頼まれた。世話する教授の出迎えを受け、応接間に通された。そこでお茶を持ってくるのも、時間がきて講演会場に案内するのも、脱いだ靴をそろえ、スリッパを提供するのも、みな学生である。

「本学は学風を大切にしますから、なるだけ上級生が率先して実践し、下級生がおのずからそれを身に着けるようにしています。全人格的教育なんて、今どきの大学ではやらないでしょうが、教職員協力して学風を盛り立ててくれます」。

と案内して下さった教授はもの静かに語られた。当時ベトナム戦争の初期、大学の多くは、学生の立てた看板や、まき散らしたピラで荒れ果てていた。ことに東大は

ひどかった。それだけにこの日の印象は強烈であった。それから何度かこの学園を訪れた。数年前には旧知のあるジャーナリストが麗澤の教授に移られた。私と同様、その学風に感銘を受けたと話され、大いに共鳴したものである。挙措動作の折目正しい学風は昔と変わらない。今回も心暖まるもてなしを受けた。……

この文を一読した時、思わず顔がカーッと火照ってきて、その火照りがなかなか冷めないで、しばらく外に出てやたらと近所をぐるぐると散歩してしまいました。顔の火照りの原因は言うまでもありません。衛藤先生の心のこもった一文に、思わず現在の麗澤大学の学生の姿をダブらせてしまったからです。なぜなら、最近の学内の現状はちよつとどころか、見方によってはだいぶ由々しき問題が多いと指摘せざるをえない状況であるからです。このことはすでに、学生部及び学生委員会からの連名で両学部に提出いたしました「今のままで麗澤大学はよいのか」という提言でも触れましたのですが、いま一度ここで、学風を守り育てるといふ視点から、改めて考えてみたいと思います。

まずは、最近のキャンパスの状況から。  
① 盗難事件の多発

昨年四月、大学構内で落としたりとしか考えられない「郵便局のキャッシュカード」(同時に学生証も落としたり)が、翌日、柏市内の「つくしヶ丘郵便局」で口座から引き出された事件を始め、学内のトイレや教室で、鞆やハンドバッグから財布だけが抜き取られる事件もおきました。平成六年度は、こうした盗難事件は合計四件にのぼりました。そのほかにも、自転車の盗難事件も学生課に数件寄せられています。

## ② マナーの悪化

衛藤先生のせつかくのお褒めにあずかりながらも、空カンの бой捨てはだいぶ改善されましたが、タバコの吸い殻は相変わらずの状況です。しかし、わずかながらも好転の兆しがないわけでもありません。それは学友会の役員や剣道部の部員らが積極的に学内清掃のボランティア活動を展開してくれているからです。最近では別科の留学生たちも清掃ボランティアに立ち上がってくれています。

マナーの悪化にともない、当然、モラルもはなはだしく低下してきています。特に変造テレカの使用などはまったくもって遺憾とするところです。いくら掲示等で絶対禁止を呼びかけても、一号棟一階ロビーの公衆電話などでは頻発しています。NTT柏支店を呆れさせている始末です。

さらにはバイクや自転車の駐輪場の使用状況をみれば、学

生のマナー感覚はもっとよくわかるでしょう。注意を促しても一向に登録はせず（ちなみに本学では自動車・バイク・自転車車の学内乗り入れについては登録制をとっている）、限られたスペースの駐車場所にもかかわらず、大学生にふさわしい気配りはあまり感じられません。自動車も同様で、駐車場の枠外や樹陰等の自分本位の場所に駐車して、一向にお構いなしといった態度です。バイクのノーヘルメットや自転車の二人乗りなど、警備員の注意はまるで聞く耳をもたないかのようです。

また、授業の空き時間は冒頭のとおり、まるで小学校の校庭のようで、自分たち本位のサッカーや野球などで、せっかく青々していた芝生はいつしか土埃りが舞う始末。そのくせ、運動部に入って仲間たちとしっかり汗を流すという事は嫌いなようです。麗澤大学学生の運動部加入率がわずか全体の一五パーセントという数字が、如実にこのことを示しております。

さらには、男女の風紀や服装となると、野坂昭如氏が、  
……なんだか、眉目形佳き若者が減った印象。特に去年あたりから、少年は、ダブダブの七分パンツにTシャツ、パカでかい編上げ靴、野球帽の底を後に冠り、少女は、自らの才なきを改めて思い知るのだが、どう描写し

ていいのか。映画の葬儀シーンのエキストラが安いギャラに不服いいつつ、ドーランも落とさず渋谷、新宿へ繰り出した感じ。中の、ことさら醜い同士が、ブスはブオトコの肩に頭をあずけ、手を腰にまわして引きつけ、ブオトコはブスのケツに掌をあてがい、かつブスのツラしきりに眺め入り、もつれ合いつつ、暗い表情で歩く。かつて醜男の、とんでもない美女と連れ立つ姿を眼にし、なるほどこれをしも天の配済というべし、遺伝学的に正しいと、嫉妬の炎をなだめたものだが、当節、盛り場、電車の中で見受けるイチャイチャの手合い、例外なく割れ鍋底にとじブタ面。あの、お互いの体のどこか触ってなきや気が済まないというのは、明かに幼児現象。……

（『週刊文春』94・12・8）

と、いみじくも指摘しているとおり。

あれあれ、こうして書き連ねてくると、まるで一昔前に流った漫画のハレンチ学園のようになってしましますが、もちろん、他の大学に比してまだまだましな方だよ、と語ってくれる同僚もいないわけではありません。学生たちの中でも、芝生が駄目になってしまったと心配している者の方が圧倒的に多いのです。マナーや規則違反に対して、われわれ以上に厳しい視線を向けている学生の方がはるかに多いのですから。

確かに、私の見方はあまりにも悲観的すぎるのかもしれない。学生部長という職責から必要以上に学生のアラが目につくのもかもしれません。なるほど、大部分の学生は麗澤のよき学風に馴染み、育まれているようです。しかし、麗澤大学はモラロジをバックボーンにしている大学です。まだまだましだ、といわれているような現状肯定であってはならないのです。さすれば、全体的にみると一部の学生の雰囲気が他の学生にも伝染したのか、緑や気品を大切にしてきた学風からは、なんだかじょじょにはありますが遠ざかっていく感じがしてなりません。よく言われているように、一度失ってしまったものはなかなか取り返すことはできません。時代の流れに押され、かくして、諸先輩が今まで培ってきた伝統の精神は、ひとつまたひとつと消え去っていくのでしょうか。

ある人が、わが国の最近の学生の特徴として三つのキーワードを挙げています。いわく、心理的には「人間不信」、人間関係では「コミュニケーション不在」、そして行動の面では「指示待ち」であるそうです(『大学時報』第四三巻二三八号、P一九)。なんだか、学生部に持ち込んでくる各種の相談事が、あたかも自分だけよければ、今さえ楽しければそ

れでとよい、と言わんばかりのものが目だって多くなってきているのと、符合するかのようです。

かつて、大学生なんだから注意しなくてもそのくらいわかるはずだ、と彼らの「常識」にまっていたものが、いまや急速に崩れ、目を覆いたくなる惨状を呈してきているのだと言ったら、言いすぎでありましょうか。

しかし、これらのことはどこかで立ち直していかなければなりません。幸い今年、学園創立六〇周年、そして四年目を迎えた新学部の完成年度にもあたる節目の年です。われわれ大学の目指している目標、すなわち、創立以来一貫して堅持してきた、高い人間性、道徳性を備え、国際社会に貢献できる人材の育成を、今一度確認し、学祖の掲げた高い理想の実現に一步でも近づけるようにする絶好の機会でもあります。今こそ、教職員一丸となってよりすばらしい麗澤大学にしていかなければならないと思っております。そして、伝統を踏まえ、しかも、二一世紀にふさわしい新たな学風を自らの手で造り出していかなければならないと思っております。

# 麗澤大学の魅力は何か

—一〇年間の広報活動を通して—

外国語学部教授  
広報委員長  
三 瀧 正 道

## (1) 一〇年一昔

今から一〇年前、麗澤大学は、定員九〇名に対して、受験生は僅か一七五名だった。また、一三ランクショックという言葉が残っているように、入試難易度による偏差値ランクは、底辺をさまよっていた。

本年、本学の受験生は五〇〇〇名に達しよう。いわゆる偏差値も、上位校と肩を並べる。大学の価値は偏差値で決まるものでないが、カリキュラムの内容、教育成果、就職、施設などが、偏差値の動きに反映されることもまた確かなことである。

この一〇年間なぜこのような成果を挙げることができたのか。この間、ほぼ一貫して、本学の広報を担当し、痛切に感

じることは、本学が持っていた潜在的長所のおかげだということだ。仮に如何に資金が潤沢で人手があっても、これらの長所がなかったら、とてもこの短期間での急成長はなかったと確信する。

以下、これらの長所を再認識、再発見してみたい。今後の本学の教育のあり方にも深く関わるテーマである、と言えよう。

## (2) 四つのハンディ

一〇年前、広報業務を開始した頃のメモを見ると、「四つのハンディ」と走り書きがあった。

それは、

①モラロジが宗教と誤解され、その信徒養成大学と見られ

ていること。

②小規模大学で教員の雑務が多すぎ、大学に活力が不足していること。

③全寮制のため、地域からの応募が少なく、学生も強制居住の被害意識が強い。

④首都圏にある大学に比べ遠く、地の利が悪い。(千葉―茨城のイメージも)

ところが、広報を開始して二年ほどして、外部の広告会社の担当者が、ある日私にこう言った。

「私は五〇以上の大学を担当していますが、どこへ行っても、長所を探すのに本当に苦労します。やっと見つけて、思い切り大きく取り扱う。ところが麗大は、材料がゴロゴロ転がっている。どれも磨けば大変なものなのに、ちっとも広報していない。もったいないですよ。ため息が出る。」

そうだ、麗大のハンディとばかり考えずに一皮剥けば長所にならないか、卒業生は皆、母校に強い誇りを持っている。それは他にない何かがあるからだ。それは他でもない、今、ハンディと想っているこの中にあるのではないだろうか。発想を転換しよう！

こうして、ハンディの再検討が始まった。

### (3) 麗澤大学Ⅱ宝の山

そのⅠ——建学の精神Ⅱモラロジャー——

もし、建学の精神が、本当にその大学のハンディなら、その大学は存在理由を失うだろう。しかし、モラロジャーの社会での評価と活動を見れば、また、多くの学者による研究と評価によれば、本来、ハンディとなるはずがない。問題は、逆に、その建学の精神的社会的声価によりかからず、その七光りの下で、大学として当然取り組むべき課題をおろそかにした点である。この親方日の丸の体質を改めるために、荒治療をした。一時、パンフレットから、モラロジャーという言葉をとってしまったのである。当然猛反発をくらった。しかし、私は歯を食いしばった。「モラロジャーという言葉なしでも充分人々に魅力ある大学」を作ろう。人々が、「この大学は何と素晴らしい大学なのだろう。どこが他と違うのだろうか？」と疑問を持ち、その源が、モラロジャーという建学の精神にあることに気がつくようになるまで、暫くの辛抱だ、と。

三年間経った。留学制度、国際寮、通学制度、と様々な改革の結果、相当、地域に浸透してきた頃、そろそろよろう、とまず大学説明会で廣池博士の学問的業績に触れ、

園内の記念館の前でも、同様の説明を行った。そして、父兄、生徒の、心からの感動の言葉を聞いたのである。

本学の教育が高い評価を得るに到った今、更に一步踏み込んで、わかり易い建学の精神を説くパンフが欲しい、と思う。それには、用語の一層の検討が必要だろうが、いずれにせよ、教職員が、正面から、自信と誇りを持って語り、社会へアプローチする姿勢が不可欠となる。

その2 — 小規模大学 —

小規模も、教育という面から見ると、途方もない長所に変わる。受験生が本学に参観に来て、充分な説明や対応に格別の人情を感じるのも、また部外の人が、学生と教員の家族のような触れ合いに感動するのも、小規模なればこそとも言えよう。一人の学生を一つの人格として尊重する、それは異文化コミュニケーションの基盤にもなる。

本学の魅力の九割がたは、この心の通じ合う温かいキャンパスに収れんされる。逆をいえば、いかに現代人が人情味に飢えているか、ということにもなる。この点は、教員個々の学生指導の対応の仕方に鮮明に表れる。それがまた広報の材料にもなる。学生個々の悩み、進路は勿論、個人的な悩みまで、親身に相談し、単に勉学上の成長に止まらず、精神的自立に積極的に教員が手を差し伸べる大学は珍

しい。その意味で、麗大はまさしく、“教育”の存在する大学であり、“人の育つ森”であり、単に教員の研究と、経営のための授業料集めのみの大学とは、大いに異なる。

心の成長を一人一人支え励まし、しかも、社会に役立つ実用力を徹底して鍛える、そこに本学の魅力があると言えよう。而して、その教育の源に、モラロジーという理念があることで、その柱がぶれたり、個々の教員の対応の仕方に軋轢が生じたりせず、結果として見事にハーモニーをかもし温みのあるキャンパスが形成されてきたのである。

その3 — 全寮制 —

通学制を導入し、入寮は選択にしたとたん、あれほど不平のあった寮は、あこがれの対象となり、競争率は、毎年二倍を超え、入寮できなかった者の不満の声がしばしば聞こえるようになった。しかも、多くの留学生が同居する寮は、国際寮として、全国の注目を浴び、受験生の熱い眼差しを受けることになった。

江田島式の上下関係でなく、モラロジーによる慈悲寛大自己反省の精神に基く、自由にして節度のある自治寮は、互いの人間性を尊重し、異なる価値観を受容する場として充分機能している。特に規則破りや整理の悪さなどを指摘する声もあるが、訓練の場で試行錯誤は当然であり、それ

を封じる強権を用いれば、即江田島になってしまうだろう。取り返しのつかない失敗は防ぎつつも、自分で考え、処理させる今のあり方は評価されて良い。

その4 — 地の利のなさ —

本稿の趣旨と多少ずれるので、多舌は慎むが、多くの大学の郊外移転や、武蔵野線の開通による交通の便、また、千葉方面への首都圏の拡大などで、むしろ不利が有利へと転化されたことは、外的要因によるものといえ、ありがたいことである。

その上で、本学の緑に包まれたキャンパスに、馬や兎といった動物が放たれたことは、環境と命にやさしい本学の姿勢を人々によく理解させるのに役立ち、一層の温かさを人々に感得させている。

広報の立場から言うと、百の説法より一匹の兎で、これほど如実に私たちの気持ち伝えてくれるものかと、ビックリするのである。廣池博士の、樹木一本に到るまでその命を大切にされた思想が、実にわかり易く人々の心にしみ込むのである。

#### (4) 結語

字教制限もあり、事象を述べるのに精一杯で、細かな分析

までは語るべくもない。しかし、以上の大ざっぱな議論からだけでも、本学の魅力が、はっきりと浮かび上がってくる。簡単なまとめをして結語としたい。

(一) 確固とした建学の精神のある事。

イ. 学問性、客観性がある。

ロ. ヒューマニズムに基いている。

ハ. 経世済民の実学性を備えている。

(二) 教職員に普遍的倫理観として建学の精神が根づいており、

一体感があること、

イ. いざという時に無私奉仕の精神があること。

ロ. 外部の人に対し、「お世話させて頂く」という謙虚な

姿勢をとれること。

ハ. 人を育てることに対し、教職員の別なく、懸命になれること。

(三) 品性教育により、個々の人格を尊重する気風があり、特に外国人など異文化を持つ人々に対し、日本的な排他意識がなく、むしろ尊敬して接すること。

(四) 豊かな自然の中で、環境と命を大切にし、共存の意識が育まれていること。

キャンパスに確かに「教育」が存在している大学、それが麗澤大学なのです。



# 留学生から見た麗澤大学

外国語学部日本語学科四年生

朱

春  
瑟

私がこの大学を知ったきっかけは、外国語学部の水野先生が上智大学の人間学の先生と関わりがあったことから、勧められて大学を見学にきました。そこで、たまたま2号館の洗面所に入ったとき、古い建物にもかかわらず、綺麗に掃除してある心遣いを見て、この大学の精神に触れた思いがしました。短い受験勉強にもかかわらず、幸いにも入学が許可されました。表からは人の目に触れない洗面所の綺麗さが私の入学動機を促したように、それぞれの留学生もそれなりの動機を持って入学してきたことと思います。

## 1. 大学での各国の留学生の生活

留学生の多くは、別科生を除き、東南アジアからの学生です。現在、学部には留学生が約二五〇名在席していますが、

そのほとんどは中国、台湾、韓国、マレーシア出身です。留学生たちは大学生活が始まると、まずそれぞれの国の同窓会に属し、安心感を求めて固まります。初めのうち、一般的に他の国の人々を見るまなざしは、母国で受けた教育や、マスキミの影響による先入観に大きく左右されます。そのため、大学に入って最初の挑戦は、いま現実に体験しているものと自分の持っているイメージとの相違による戦いです。これは勇気のいることであり、往々にして、自国の人と固まって、他の国の人々について批判するようになりがちです。そのほうがホームシックの癒しにもなり、また、異国生活のストレスの解消にもなり、ずっと楽だからです。

学校側も交流を計って様々な行事を企画していますが、現実的には余り魅力が無く参加する人が少ないようです。また、

時間的な無理や、もともと交流のない人達と貴重な休みの時間を割いてまで関わりようとは望まないのが現実です。その現実を受け止めて、国際交流をより活性化するのが学校側の一つの課題だと思います。

アジアからきた留学生にとって大きな課題は経済問題です。母国との経済格差が大きいため、自国からの援助が期待できず、日本で勉強と生活費の調達を両立することは非常に困難です。奨学金以外にも、病気や事故など、特別なときは不安に陥ってしまいますので、学校側で何か救済策を講じていただけたらと思います。

## 2. 日本人との関わり意義

日本人との関わりはまず、国際交流課の職員との関わりから始まります。それはあらゆる手続きや、生活の仕方などの現実的な助けが必要だからです。言葉の違いや生活習慣の違いから意思の疎通がうまくいかないこともあります。皆一生懸命関わってくれ、大学の暖かさを最初に経験するところでもあります。

次に関わるのは、自分のクラスメイトです。学生同士、最初の段階は互いに好感を持って積極的に関わりようとしています。経済的理由から、アルバイトをしている人がほとんどで時間

的に余裕がありません。また、年齢差もあります。留学生のほとんどは二〇代後半から三〇代で、考え方のギャップがあり、コミュニケーションが取りにくい原因ともなっています。

アジアの学生にとって、儒教の影響から尊敬の対象である教授は留学生にとって近寄り難い存在です。教授の方から近付いていただけなければ、学生のほうから近付いて行くことは非常に勇気がいります。幸いにも、この大学の教授たちは学生と積極的に関わりようとして時間的にも特別な配慮をしてくださっているのが分かり、少しずつ近づいて行けるようになります。

このような関わりを持てるので、大学での留学生の居心地は快いものになっています。短く、狭い経験とはいえず、日本社会でのアジアの学生を見るまなざしとは違うものを感じるからです。それは、出入国管理局に行っても、社会ではマスキミの影響からか、アジアからきた留学生を否定的に見がちですが、大学では教授はじめ学生たちが善意を持って、肯定的に接してくれるからです。このような体験で、留学生の日本に対するイメージが学生生活の中で少しずつ無意識的に変えられていく部分があると思います。

人はその存在が肯定的に受けとめられるとき安心感を覚え、自分の存在を自然なものと思えてきます。言葉の限界や、

興味の問題もあり、勉強の上では満足する人もそうでない人もいますが、この大学に毎年、留学生の受験生が増す要因はこの全体的な暖かい雰囲気によると思います。

### 3. 交流がもたらすもの

国際化が盛んに話題となっておりますが、本当の国際交流はまず、自分の持っている偏見を突き抜けて、新しい目で、相手を見ることから始まるとおもいます。それができる人はほとんど他の国の人と関わることができませんが、そうでない人は、何時までも自分の国の人としか関われないでいます。出来る人は人間として一回りも二回りも大きくなり、日本での生活が実り豊かなものになります。そうでない人は生活範囲がいつそう狭くなり、自分の中に閉じ籠ってますます他国の人を批判的に見ていくようになります。それゆえ、学校の企画は充分とはいえないとはいえ、あくまでも機会を与えるものであり、それを生かすかどうかは結局本人自身の課題ともいえます。

次にこの大学での私自身の経験を少し書いてみます。私は日本に来てから団体生活をしています。国際的な団体ですが、台湾人はわたし一人です。その中で、生活習慣や表現方法、考え方の違いからくる摩擦に疲れたときもあり、誤解や無理

解に心が傷ついたこともありました。時には、自分の人格まで否定的に感じとってしまい、他人を拒否してしまったこともあります。この大学に入ったときは、丁度、心が疲れ切っているときでした。大学では日本語の勉強に精を出し、人とは関わらないことを決心して入学してきました。それが、入学式の日に、入試面接の担当の先生が声を掛けて下さり、私がこの大学にくることを歓迎してくださいました。また、オリエンテーション・キャンプの時には、すでに仲間ができていた同国の人々が私を仲間にいれてくれ、授業が始まってからは、他国の人も近づきになり、教授の方々も心から受け入れてくださいました。このような関わりを通して、私の方もどんどん心を開いていき、徐々に自分の存在を喜べるようになり、精神的にも心理的にも癒されていきました。このような人格的な成長を得ることは私には予想もしなかった、この大学での一番の大きな恵みでした。

この大学は、まだまだ小さな無名の大学ですが、小さいからこそ人間関係が心からの触れ合いで、今の日本社会では貴重な存在だと思えます。私はこの大学に入ったことを非常に喜んでいきますし、誇りを持って人に大学のことを話しています。

寮

生

の

絆

国際経済学部  
国際経営学科四年生

村松

美幸

大学に入ってから三年間ずっと寮生活をしてきました。この三年間でたくさんの方達をつくりました。日本人の方達だけではなく、台湾、大陸、香港などアジア中心の方達をつくることができました。私が住んでいる麗澤大学女子寮5号館は国際寮の中でも一番人数が少なく、建物自体もそんなに大きくありません。大学の入学式を行う一週間前、わたしはたくさんの方達の手を持ち、学寮課で部屋の鍵をもらいました。「5号館一階です」と教えてくれました。鍵を手を持ち、多くの新入生が一番高い立派な白い建物に入る所を見て、あゝ、自分もあの建物に入るのだと心の中でそう思いました。その時、ある先輩に「5号館の人ですか、私の後ろについてきてください」と、そして私の荷物を代わりに持ってくれまして、わたしを案内してくれました。あの立派な建物と逆方向に歩

きだし、一体どんなところに連れていかれるのか少し不安でした。ちょっと歩いて大学の敷地から少し離れた場所にある5号館につきました。緑に囲まれた二階建ての建物、その後ろに青々とした広い芝生があり、部屋に入ると窓から池らしきものが見え、素晴らしき環境でした。こんな素晴らしき環境の中で生活し始めても、やはり親と住み慣れた場所を離れ、初めて全く赤の他人と共同生活するのは不安と寂しい気持ちでいっぱいでした。最初の頃ホームシックにかかり、自分の部屋で涙を流したこともありました。気持ちが落ち込んでしまっ、私は周りの人にあまり声を掛けませんでした。周りの人に暗い人だなと思われたぐらいでした。そんな私に對して、「もし何かあったらわたしのところに遊びに来て、いつでも相談相手になってあげるよ」と言う優しい先輩の一

言が身に染みました。それから一週間位たって、私は元通り元氣になりました。

× × ×  
大学に入り、大学は一体どういふものかと好奇心に溢れる私は、寮、大学、いろんなことについて新鮮さを感じました。教室に行く途中、いつも全く知らない人に声を掛けられ、「おはようございます」「こんにちは」・・・ごく普通の挨拶言葉だけど、何故か胸が熱くなりました。それは他の大学では絶対見られない光景です。わたしはすっかり麗大のこの礼儀正しい雰囲気が好きになりました。この大学の学生はみんな話しやすく親切な人ばかりだと感じました。

× × ×  
寮生活に慣れるにつれて、寮のすべての新生と友達になり、通学生やアパートに住んでいる学生からは「寮生っていいね、すぐ友達ができるから」と羨ましがられたことがよくあります。私も内心では寮に入ってよかったと思っています。アパートに住んでいる人はまだ寂しい思いをしているのに、寮生たちはすでに深い絆に結ばれたように毎日楽しい日々をおくっていたからです。

しかし、寮生活はよいことばかりではありません。寮生活は第一に集団生活であり、みんな一つの家族のように生活しても、同じ寮に住んでいるほかの人の立場や気持ちを考えながら行動しなければいけません。寮生活では個人のわがままは許されません。寮で決められた規則を守った上で、個人の自由は初めて認められます。現在私が勉強している経済学でも同じようなことを教わっています。「自由な自然的人間の集まりが秩序ある社会を形成し得る」といえますが、そのためには、「人間はその際に社会契約という、いわば法制的概念を導入し、自由な個人の集まりはかかる契約を通して初めて秩序ある社会を形成し得る」のです。この契約を通じて、自然はすべての人間に全てのことを為す権利を与えてくれました。それゆえに、各人は各人の力の及ぶ範囲に権力を行使することができ、契約によってのみ社会はバランスよく保たれることができます。

× × ×  
寮生活も小さな社会と同じように、みんな寮規則をきちんと守るといふ契約を結んだ上で寮に入り、自分の権利を行使するときに他人の権利を侵害してはいけないのです。つまり同じ場所で生活する人に不快感を感じさせないように行動を取

ってはいけません。それは寮の原則であり、またみんながよい良い生活を確保する為の基本的な条件でもあります。ひとりの人間として、他人に迷惑をかけてはいけないという最も基本的な道徳的概念は寮生だけではなく、すべての人に、大切なことであると思います。

x x

寮生活を通じて、相手の立場に立ち、物事を考える習慣を身につけました。また自分の行動が毎日共に生活している友達にどんな影響を与えるのか、年と共に自分の責任というものがわかるようになりました。一年生のときはよく寮の規則を破りました。しかし、いま自分は上級生になり、点呼破りをして遅く帰ってくる人に対して、同じ寮の友達がいかに心配しているのか、よくわかるようになりました。また時にはひとりの勝手な行動によって全体責任になる可能性もあります。寮のルールが多すぎて不自由さを感じますが、いかに楽しい寮生活を過ごせるのかは本人次第だと思えます。

x x

寮生活を通じてたくさんの人間と触れ合うことができ、全く違う学年、学科の友達をつくり、会話の中でいろんな人が

それぞれ自分の考えを持っているということがわかりました。違う考え方を持っている人間と接触し、自分にとっても大きな刺激になったのです。最もわたしに感じさせたのは、共同生活における人間関係の大切さ、そして周りの人々と協調し、近い将来社会に出て一人の人間として他人に心配を掛けるはいけないことを学びました。

x x

いままでの寮生活を振り返って、新しい人と出会うことの喜び、友人との別れに対する悲しみ、国籍を越えての友情、特に淡江大学の学生と知り合ったことは、私にとって大きなプラスになったと思います。この家族のような共同生活の場は、国際的な視野が広がるだけではなく、寮生一人一人が大人に成長する場所でもあるように思えます。

# 初代学長廣池千英先生を想う

国際経済学部教授 谷口 茂

廣池千英<sup>ちがき</sup>先生が目を覆うためにかけていたメガネは、少し離れてみると黒く、表情が隠れ、学長ということもあって学生には近づきがたいところがあった。昭和二七年、麗澤短期大学入学の時の、私の印象であった。その後、近くでお話を伺う機会をいただいて、メガネの向きと光の関係で中央部分が透明になることに気付き、その奥にいつも微笑んでいる暖かい目をみつけたときの驚きを、懐かしく思い出す。

もう一つ、鮮明に甦る光景がある。群馬県谷川講堂での校外授業の折のこと。私達学生数名が、講堂から坂を下った街の食堂でかき氷を学長に御馳走になっていた。その辺りで出くわしてのことだった。「氷は口の中でよく溶かして食べる」とよい」。その頃の私の体調を見抜いての先生のご注意だった。日本が直面する問題、廣池学園と道徳科学研究所のこと

など話してくださって、先生が席を立ち、私達も満足して後につづいた。先生はいつもの袴と高下駄で坂を登った。前方に谷川岳の尾根が聳えていた。小柄な先生の肩が盛り上がっていて、大きなものを支えているのだなと思ったとき、先生が谷川岳と重なった。安心して頼りきっていた先生の、後ろ姿の思いがけない厳しさに私はたじろいだ。その時から、いつか先生の御苦労の一端でも伺い知ることができれば、と思いながら今日まで果たせずにいる。今回は先生の道徳科学研究所所長就任あたりのところまでを偲んでみたい。

先生は明治二六年の生まれで、岡山の第六高等学校文科一部甲類（英法）から京都帝大法科大学政治学科一年在籍の後、東京帝大法科大学政治学科二年に編入した。友人は先生が外交官志望で、「クラスで最もよく政治論をたたかわす論客」

だったと伝えている。思索、哲学への強い関心も先生の青春を貫いていた。<sup>1)</sup>大正六年東京帝大卒業後、富士瓦斯紡績株式会社に入社、人事問題、労働問題を七年間担当して退社。大正一三年財団法人労資協議会参事に就任、さらに七年に亘って労働問題の調査、労働争議の調停等に従事、特に野田醬油の争議（昭和二年九月〜三年四月）の解決に尽力、昭和六年五月協議会を辞して同年六月道德科学研究所次長に就任した。先生の年表による簡単な経歴である。昭和六年五月といえば父君廣池千九郎博士が栃尾又温泉で病状が悪化、死を覚悟したときである。博士は五月四日に認めた「我身今神の御傍にかへるとも誠の人をいかで見捨てむ」の辞世の歌を、五月二一日には「我身今日神の御傍にかへり行きて誠の人を永く守らん」と変えた。全く緊迫した状況の中で次長就任だったに違いない。博士はやがて小康を得、大正元年よりこの時までをモラロジの第一期建設時代とし、昭和六年をもって第二期建設時代の初年度と位置づけ、モラロジによる社会教育の展開を決意した。実業界からの突然ともみえる方向転換のなかで、次長千英先生はどのようにしてモラロジを理解し、その事業を継承していったのであろうか。

往時を回顧した先生の言葉がある。

〔従来の仕事の分野から〕今度は道德科学というところ

ろの分野に入って参りますというところ、私にはわからないことが多いのであります。大体学問上の点からいきましても、自分たちが大学で習ったところのもの——私は政治学を専攻し、政治学科という学問でない学問、いわゆるサイエンスでないところの一つの学問を習ってきた人間であります。したがってこの道德科学の哲学的な内容というようなことになって参りますと、社会におきまされた短かった経験だけでは、十分な理解を持つことはできないのであります。しかしやっぱり勉強しなくてはいけないので、本を読んだり、実際に行ったり、いろんなことをしたのでありますけれども、実はなかなかわからなかったのであります。

しかし、昭和九年ころになりました、だんだんと講習会その他その方面の仕事をせねばならないということになりました。そこで講習会などに出ることになりました。ですから、もっとより以上に勉強をし始めたのであります。しかし、それでも、十分なことはわかりませんです。ところが講習会に行きますと、地方の社会人が真剣にこれを聞いて、そうして自分の処世の道といたしまして、そのうち何分の一かを実行されている状況を見て参りますと、道德科学というものが、いかに自分たちの人



生におきまして重大な分野を占めているものであるかと、  
そういうことを、側面からうかがい知ることができると  
であります。<sup>②</sup>

先生は初心者として入所したかのように、謙虚に話をすず  
めているが、実際は昭和三年『道徳科学の論文』の出版時か  
ら父上の研究の偉大性を知り、真剣にモラロジーの研究を  
はじめていた。<sup>③</sup> さらに重要なことは、先生は次長就任前に  
千九郎博士の事業継承の修業を積んでいたということであ  
る。

千九郎博士がモラロジーの研究に取り組んだとき、人心開  
発の具体的課題の一つが、当時激化しつつあった労働問題の  
解決であった。大正年間、博士は労資に関する講演、現場に  
おける労働者の救済活動におびただしい時間を使っている。<sup>④</sup>  
千英先生が富士瓦斯紡績で七年間も人事と労働問題を担当す  
ることになったのは、このことと無関係ではなかったと思わ  
れる。ついで千英先生の労資協定会への就職の際には、これ  
が千九郎博士の希望にそったものであったことが認められる。<sup>⑤</sup>  
千英先生は労働争議の修羅場を見、調停に当たった。特に野  
田醬油の争議は激しいもので、労資ともに多大の犠牲を払っ  
たのち、結局協調会によって調停された。先生は父君が最も  
切迫した課題としたものの真っ只中で、苦勞しながら社会と

人間への洞察を深めていた。このような経過をへて、先生は  
道徳科学研究所次長に就任したのである。<sup>⑥</sup>

昭和六年九月、大阪毎日新聞社講堂にて本山彦一社長およ  
び新渡戸稲造博士の紹介のもとに廣池千九郎博士によるモラ  
ロジー大講演会が開かれ、七年には下落合に東京講堂が完成。  
これ以降、モラロジー講演会が各地で開催されるようになり、  
千英先生の出講の機会も増えていった。先の引用文で先生は  
出講を昭和九年ころとしているが、実際はもっと早い。

この頃の千英先生の講演を偲ばせる記録が一つ残っている。  
昭和八年四月一・一二日の二日間にあたって東京松屋呉服  
店（現在の株式会社松屋）において開催された道徳科学講演  
会のものである。<sup>⑦</sup>

先生は米国の金融恐慌の原因分析から論を起こして、その  
根本を究明すれば金融界、財界人の不道徳に帰すとし、道徳  
の重要性への導入とする。先生の講演は第一部が最高道徳論、  
第二部が時局にかかわるもの、世界経済の復興とわが国の経  
済の動向についてである。第二部も優れた道徳性の必要を訴  
えるためのものではあるが、国際政治・経済にかかわる内容  
の広範さ、そのデータと分析の緻密さに、先生の本領が遺  
憾なく発揮されていて、過渡期の先生の姿をよく伝えている  
ように思われる。

そういうような状況をだんだんと過ぎて、やがて昭和一〇年に学園ができてくるということになりました。全国の多くの会員の方々の感激と、そうして父の指導というものにふれておりますうちに、最高道徳というものがどういふものであるかということが、いくぶんわかりかかってきたのであります。

それで、父が昭和一三年に亡くなりましたが、それまでの三年間ほどは私が学校の方面のことを次長としてやっております。父は一年のうちの大半は谷川あるいは大穴におりまして、月に一べんくらい三日間か五日間帰りまして、それではといるんな命令を紙に書き、そのまますぐ谷川へ帰ってしまうのであります。その間、いろいろ施策をやってきたのであります。そうして問題の起こるたびに、私が、これはこういうふうにしたらどうでしょうか、こういうふうにしようと思いがどうでしょうか、こういうふうな質問をしますと、大体九割五分というものは、それでよろしいのだ、と父が承認してくれるようになったのであります。

最初は全然そうではなかったのですけれども、亡くなります前、三年半くらいの間におきましては、私の言うことにつきまして、十分これを承認してくれるようになる

ったわけであります。：そのことは最高道徳というものにつきまして、私がだんだんわかってきたと、こう申すことができます。<sup>8)</sup>

昭和一三年六月四日廣池千九郎博士の逝去にともない、先生は道徳科学研究所所長、道徳科学専攻塾塾長に就任した。先生四五才の時である。

昭和一二年蘆溝橋での衝突をきっかけとする日中戦争は、陸軍の樂觀的予測を裏切つて中国側の粘り強い抵抗に長い長期化の一途をたどり、泥沼にはまりこんだように全面戦争化していった。その結果、大動員と軍需工業の拡大による農山漁村の勞力不足、大軍拡と戦費による膨大な軍事予算、それに伴い貯蓄と消費の節約の強制、生活必需品の不足と統制經濟の進展と、全面戦争の深刻な影響が国民生活を圧迫していった。このような状況のなかでファシズム国家化が急速に進められていったのだが、国民の動員・組織化に重要な役割を果たしたものが、昭和一二年近衛内閣によって始められた国民精神總動員運動（以下、精動運動と略す）であった。<sup>9)</sup>これは挙国一致、尽忠報国、堅忍持久のスローガンのもとに国家總動員体制確立をめざす国民運動とされ、やがて昭和一五年一〇月成立の大政翼賛会に引き継がれていく。半強制的画一化が強められるなかで、戦争に積極的に賛成しないものは許

容されない状況が到る所に生まれ始めていった。昭和一三年、国家総動員法が制定されて一カ月後、戦時色がますます深まるなかで道徳科学研究所所長に就任した先生は、極めてむづかしい舵取りを迫られた。

もつとも、この精動運動に関しては、昭和一二年一二月に廣池千九郎博士が門人に対して訓示を出している。一二年一二月といえは「従来みられなかった日常的宮城遙拝の民衆への強制」が、木戸文相・末次内相のもとに実行に移されはじめた頃である。同日同刻、国民は一斉に皇居を遙拝した。<sup>10</sup> 廣池博士の訓示は精動運動に対するモラロジー団体の立場を明確にしたものである。時局に対する言及はさておき、その本質的主張の骨子は管見によれば次のようになる。

一、モラロジーは日本の国体の精華を、従来の感情的説明によってでなく、科学的に説明し、天照大神のお心である最高道徳を人心に扶植して、国民個人に実生活の標準を開示する。モラロジーは精動運動に対して斬新で適切な教育を提供するものである。

二、最高道徳は天照大神の教えと世界諸聖人の教えに一貫する原理であり、科学的にみて事実即せる人類の福音である。その根本精神は慈悲寛大自己反省である。

三、大義名分とは慈悲寛大自己反省の精神で国家伝統に真

に安心していただくことであり、ただ伝統に奉仕するだけのことなら動物でも子供でも出来る。政治家がこれを真に理解すれば、「我國民より延いて全世界人類の安心、平和の基礎が出来る。」

四、國民精神総動員はまず指導者が陛下に真にご安心をいただく心で始めねば徒勞に帰す。至誠慈悲をもって「國民上下の一致と外国との真の永久の親交」の実現をはからねばならない。

五、モラロジーの国家社会改善の方法は団体的な改革をせず、教育をもって人心を開発し、各自が自発的に改善を志すようにする。これが迂遠にみえて、かえって近道である。

廣池博士はこのなかで、多くの頁を伝統の原理に当てている。最後に付した「特別注意」では、宗教団体や教化団体に對する官憲の動きにふれている。時流は民間のさまざまな自主的組織の自主性を著しく狭めていく。そんな中で官憲の動きが活発にまた陰湿になり、彼らは時局にそぐわない自主性をもつ組織の解体、あるいはそのような組織の結成を認めない方針をとりはじめた。次の引用は緊迫した世相を伝えている。

半強制的画一化は、思想面にのみ及んだのではない。

労働分野でも、日本主義労働運動からの攻撃にみまわれ

る全日本労働総同盟(総同盟)は、「統後産業戦士としての重責」の認識、「建国の本義」の「体得」などのため紀元節祝典を行なう(『精動』一九三八年二月一日)。宗教においても、特高警察による類似宗教弾圧、天理教の「転向」をも狙った天理本道事件、軍部による執拗なキリスト教攻撃といった出来事が相次ぐ(渡辺治「ファシズム期の宗教統制」)。ために日本基督教連盟は、宮城前元旦祈禱式、赤誠奉公キリスト信徒大会を開くにいたる(『精動』一九三八年一月一日、一九三九年一月三日)。

この頃になると道徳科学研究所とその地方支部の周辺にも官憲の影がしのびよっていた。もっとも、昭和一〇年美濃郡達吉の天皇機関説攻撃に端を発して燎原の火の如く破壊的影響力を拡大していった国体明徴運動の影響の中で、モラロジーに対する批判が広池博士在世中にも出ていた。「モラロジーは天照大神を世界の諸聖人と並べているが、これは不敬だ」とか、「日本は神国だから、天照大神のご子孫である陛下は世界を統一する使命がある」という論難に対する広池博士の説明の一端が門人などによって伝えられている。

博士は不敬を唱うるものに対しては「ほとんど学問的に日本の事を述ぶ事が出来ぬ傾向を醸成し」憂慮すべきことだ

とし、「皆それぞれの四聖人の本国にては神様と同様に尊敬しておるのでありますから、この聖徳を一段下げて記すようでは学問としては不公平」になると反論している。博士は「皇室の絶対化は皇室そのものの心に有らず」という信念のもとに、それは結局「『ヒイキのヒキ倒し』にて、かえって恐れ多くも皇室を煩わし奉り皇国を害する事」になると考えていた。次の言葉もいかにも博士らしい。

「日本を神国というが、神国は日本だけでない、世界中どこ

の国も神の国である。」<sup>13)</sup>

しかし、廣池博士の亡き後、千英先生が継承した研究所は博士在世中と比して数段厳しい時局に直面していた。先生は「道徳科学の思想的真髓を解明し、その理論的正当性を護持するために奮闘した。」<sup>14)</sup>この頃の先生の講義草稿が二つ残されている。一つは昭和一四年七月、もう一つは昭和一五年七月に研究所の幹部に配布されたパンフレットである。後者から、これも管見によって先生の考えと姿勢を伺ってみたい。

先生の基本的姿勢は「皇祖皇宗のご宏謨ならびに教育勅語のご趣旨に則り、「国民」上下双方の精神に最高道徳を入れて」「聖旨の万分の一に答え奉らんこと」であり、特に指導者に対して聖旨がなへんにあるかを説くことであった。

昭和一五年は日中戦争勃発の四年目である。軍部自体に日

中戦争の性格を、満州事変の終末戦と同時に東亜解放の序幕戦と規定する認識があったが、戦争の手づまり状況からの脱出策として、戦争目的は華北分離から「東亜新秩序」へと拡張されていき、昭和十五年七月二六日の「基本国策要綱」で「大東亜新秩序」建設が主張されるにいたった<sup>15)</sup>。この年日本軍の北部仏印への進駐が始まり、日独伊三国軍事同盟の成立もみる。

ここに聖戦第四年目の春を迎えまして、時局は一層重大性を帯びてまいりました。古人の言に「兵馬をもって天下を取ること易く、詩書をもって天下を治むることは難し」とありますが、まことにその通りでございます<sup>16)</sup>。

先生はこう切り出して「東亜永遠ノ安定ヲ確保」する聖戦の有終の美を完うするためには、「東亜の一民族たるわが大和民族が世界の大民族」に成長しなければならず、その為に国民の道徳、教育問題を正すことが根本問題なのだ、「未曾有の重大時局に直面せる今日において思想国策の樹立は一切の問題の根本」であり、これを怠れば「百年の悔いを後世にのこす」とする。先生の要旨をつづけよう。「現代における最も憂うべき問題は、上下を通じ真に皇室中心、国家中心の精神を持てる人材に乏しきこと」で、朝野を問わず自己の勢力と榮達に汲々とする自己中心的人物が多く、また「局部的に

は練達の士多きも、根本的、永遠的、総合的に達観する人物に乏しい」が、これは教育の欠陥に由来するものである。

教育の指導原理は教育勅語に明白に示されており、知徳一体の教育でなければならぬ。その核心は道徳科学およびその実質内容をなす最高道徳が提示している。

先生はこの講義の中で「最高道徳の根幹であります伝統の原理および最高道徳実行の前提であり、かつこれに貫徹した因果律の原理」を中心とするが、世界や日本の歴史をして、当時の為政者にむけて多くを語らせている。例えば政略的人物に関してである。

すなわち彼等は利己主義に強くして、その利己主義の上から自己の所属する団体の利益獲得に対して甚だしく熱心であります。しこうして、自己所属の団体の相手方の利否いかんおよび第三者すなわち社会の迷惑いかにつきては少しも考慮するところなくして、無慈悲なる行動と処置をとるのです。

すなわちたとえ、国家の利益を保護するという名の下に事をなす場合でも、政治上にて強く他党を排斥するもの、強く他党のものを迫害しもしくはこれを殺害するもの、主義を異にするものを迫害もしくは殺害するもの、外交上において詐術を用い外国人を騙してその国を苦

しめ、辱しめ、もしくは小事を口実にして兵を興して外国の領土を占領し、もしくはこれと戦争するもの、このほか外国人を排斥するもの、あるいは外国人を自国より絶対に退去させようとして運動するもの、外国の物貨を排斥して絶対にその国に輸入することを妨害もしくは禁遏するもの、このほか、自己所属の会社もしくは商店の利益のために他会社もしくは他商店を苦しむるもの、君主、上官もしくは主人への忠義を口実として自分の同僚・部下もしくは使用人を苦しむるもの等があります。かようなものは、ついには皆自ら滅亡するのです…。

その理由はかかる極端なる性質の人は、その君主・国家・人民その他のものを愛する心もなく、あるいはたとい幾分かはありとするも、元来、慈悲寛大の心なくしてただ自己の功名および利益を獲得することにのみ急なのですから、従来の因襲的道德の立場より見ても、その人の心理状態は極めて陋劣なのです…。

以上のごとく、宇宙には幾多の自然の法則存在して、これに適わざるものを淘汰しているのです。これらの諸法則は、いかなる人力をもってしてもこれを支配することはできません。しかるに現代人は、権力、金力等の力をもってすれば、何事でもできるものと誤認し、人

為淘汰にさえかからなければ、それでよろしいと思つて、終世汲々として空と過ごしてしまふのであります。小さな自己の欲望にのみ夢中で突進しておりますが、「天網恢恢疎にして漏らさず」みな自然淘汰にかかつてしまふのであります。

これを免かれて、人為淘汰はもとより自然淘汰を免かれて、真の幸福と万世不朽の運命とをもちたらず途は、ただ一つ天地自然の法則に従つて努力すること、すなわち最高道德を実行すること以外に何ものもないのであります。

さらに「人類の進化および退化の法則に関する歴史的不変の概要」の章で次のように述べる。

古来、東西の歴史上にて君主、貴族もしくは国家の興隆する原因とその滅亡する原因とを総合概括してその結論を求むれば、その主要原因は、実に道德の質と量と方法のいかんによる、ということができるのであります。

第一に、古代のギリシア、ローマの盛衰のごとき、一々歴史上の事実を挙ぐるまでもなく、明白なることであります。

第二、近世における各国の興亡の状態を見るもまた同様であります。すなわちスペイン、ポルトガル、オラン

ダおよびポーランドなどの盛衰興亡の原因も、要するところ、道徳の問題に帰するのであります。

第三、最近における露国・独逸および奥太利の王室の滅亡のごとき、その内外に対する専横・圧制および鉄血政略などのごとき不道徳的政略の結果にはかならないのであります。これと同時に、これらの王室が過去において興隆したのは、皆その祖先が道徳的努力にもとづける知識を活用したことによるものであるといい得るのであります。

第四、支那歴代の歴史を繙くに、その歴代皇室の滅亡は、実に二十有余にも及ぶべく、このほか、支那の一部に割拠せし首領者を加うれば、さらに数千家を増すでしょう。これら貴族の盛衰興亡の原因、みな道徳に關係せぬものはないのであります。

第五、日本皇室のご祖先は最高道徳を行なわせたまい、歴代の天皇または皆道徳をもって内治外交の本となしたもうたのであります。

ゆえに、古今いまだかつて革命がありません。しこうして、古来、わが皇室の藩屏たる主なる若干の華族は、その祖先がとくに皇祖玄宗のご宏謨に従いて最高道徳を実行せし結果、今にいたるまで万世不易であります。

しかるに、日本封建時代における幕府の興亡を見るに、まず平氏・源氏交互に力をもって興り、不道徳をもって亡んでおります。(日本の封建制度は源氏に生まれど平氏の時すでにその萌芽を發す)(中略)

先生は力によって興り不道徳をもって亡んだ例に及んで、次のように論断する。

されば、決してその原因と結果とが終局において相比例せぬものはありませぬ。これを要するに、すべて古今東西の歴史および社会学的事実によりて判断するに、国家の滅亡、貴族・富豪・旧家・宗教の本山もしくは本部・会社・銀行その他各種の団体の失敗もしくは滅亡は、その首脳者もしくは幹部の不道徳に出ずるか、もしくはその団員多数の人心の頹廢によるのであります。しこうして、首脳者もしくは幹部の頹廢は、革命にてその当事者を排斥するによりてその団体を救うことができ、その団員多数の頹廢にいたっては、その団体の瓦解を免れぬのであります。

しこうして、団体も国家も、もしくは個人も、結局道徳によりて興隆し、不道徳によって滅亡するのであります。たいていの場合、団体も個人も、初め微力の時には道徳的にして興隆の原因を作り、ひとたび成功するや不

道徳となりて、滅亡の原因を作ります。この道徳の実行に対する因果関係の大法則は、あらゆる団体およびあらゆる個人に適用して、一つも誤ることはありません。

次に、自然の法則がいかにように働くかを平均法によって説き、次のように結んでいる。

ゆえに私どもは、第一に日本の有力な政治家に聖人の教えを体得してもらいまして、国家の政治を根本的に最高道徳化させ、あわせて国民教育の基礎を最高道徳に置き、次に第二に日本の財閥と中流以下の農、工、商業家の精神にこの最高道徳を入れて、その双方に階級成立の原理、生存競争の原理および因果律等を服膺せしめ、かくて相互に自己反省して真にわが国の産業、経済の更生発展のために努力をなすようにと申うて、現にそれに対して微力を尽くさしていただいております。

されば、貴族や政治家や財閥の人々を始め、国家の有力者はもちろん、すべて一般国民がすみやかに最高道徳を体得して、聖旨の万分の一に答え奉らんことを願ってやまないのであります。

日本が未曾有の難局に直面するなかで、先生は時局に順応しながらも、父上から継承した真理をその根本的解決策として、一步も譲らず主張している。それは天地の公道に基づい

て日本のあるべき姿、とるべき道を訴えているが、当時としては随分勇気を要する発言であったはずである。ここに父君が生命を賭して築きあげたものをしっかり受けとめ、逆境にあって決然と守り続ける継承者の姿がある。先生の面目躍如たるものがある。

先生のこのような努力の最中、先生の知らないところで一つの動きが生じていた。名古屋と神奈川がこの動きの拠点になっていたようだ。名古屋では古い講師クラスの子備役の陸軍中尉が「モラロジ」はこの非常時に何をしているか」「これからのモラロジは国策に添い、国難に殉ずる手本を示さねばならない」と激をとばしたのがこの起りだと言われている。この手の幹部が国のためにとり大義名分を振りかざしてモラロジ団体の内部に派閥を作りはじめたが、時勢に乗った名分の主張だけに、心ある幹部も下手な反対は出来ずに苦慮していた。

このような、動きは横浜でも顕著になっていた。有力な講師の周辺に集まった研究者が、モラロジ教育を激烈な口調で非難しはじめ、道徳科学の看板を降ろして「臣道修練会」に換えるべきだと主張していた。横浜の心ある研究者は、この動きの震源地は横浜だったと確信している。このようにして広池千英所長に批判的な派閥的勢力が東京、大阪、高松など



の大都市でも力を得、この勢いが昭和一六年二月八日本部で開催される幹部研修会に流れ込んだ。紛糾を呼んだ問題点は、道徳科学研究所は大政翼賛会の新体制指導理念に合流すべきか否か、翼賛会の傘下に入るべきか否か、麗澤館に臣道実践の看板を掲げるか否か、であった。所長批判派は有力者が気脈を通じ合っていて圧倒的に優位であったようだ。一方所長の方は全くの無防備で、ことがそのような大問題になっていることを把握していなかった。事態を悟ったのは研修会開催前の人の動きと混乱を知つてのことのようで、「知つたときは手の打ちようなし」<sup>19</sup>だったようだ。

二月八日、幹部研修会の初日午後一時半、先生は参加者注視のなか演壇に立った。

「現下の国家情勢に順応するために、やむなく、この道徳科学研究所を發展的解散致します。」

全員が固唾を呑んだ。誰も予期せぬ、また容喙の余地のない宣言であつた、先生を批判する側にも、先生を慕う側にも<sup>20</sup>。しかしそれは「国の言論統制への即応であり、同時に研究所内外のいろいろな困難を一挙に断ち切る英断」<sup>21</sup>であつた。先生が千九郎博士から研究所を受け継いで実に三年目のことであつた。

先生の研究所閉鎖に関する挨拶要旨の一部は次の通りであ

る。<sup>22</sup>

次に昨年の大政翼賛会が成立し、大政翼賛、臣道実践が唱えられておるのでありますが、これは勿論、我々が平生皆様と共に絶叫して来たところでありませう。

抑々道徳科学は、亡き父が一生を通じて畏れ多くも皇室の御為め尽忠至誠の御奉公を致さんが為め惟神（かんながら）の大道を学問的に闡明せるものであります。神官の家に生まれ、惟神の道によつてその精神が骨の髄まで浸み込んだ皇室中心の精神を、近代科学に則つて之を具体的に示して、以て天業翼賛、臣道実践の途を明らかに致したものであります。道徳科学は単なる観念論に非ず、思慮淺薄なる青年子女を相手にする感傷的信仰論に非ず、実践窮行の学問であります。真に今日の時局を見て、万民己を空しくして皇室に帰一し、絶対の忠孝報恩の途を明かにして、品性を完成せしめ以て真の職域奉公を致さしめんとする学問であります。然しながら、何分にも原典は昭和三年に出来たものでありますから、種々の点に於て訂正を要すべきものあるは認めざるを得ませんで、論文第三緒言第一条の(三)に於て、亡き父が「私の道徳科学研究室若しくは将来拡張されたる所の同研究所に於ては、第一に本書の訂正を続行し且つ併せて是等

の取り残されたる諸項目の研究を為す筈にて云々」と記せるに基づき、今日は等の諸点を適当に修正せんとする積りであります。

須らく指導者は、氷の如き冷静さと、火の如き熱情と、高邁なる識見と不動の信念とが必要であります。只徒に、時局時局と騒ぎ立てて不安焦燥の氣を以てつまらぬ流言蜚語に惑わされ、徒に右顧左眄(うごさべん)して自己の信念を持ち得ざるものは、此重大事局を乗り切る事は出来ませぬ。私が今日まで黙って静かに時局の推移を眺め深甚の考慮を払って来た所以は、実に茲に存するのであります。

今や時局の緊迫は其極に達し、八紘一字の大使命を思う時、私共は只管聖旨を奉戴して和衷協力、益々力強く勇往邁進致さねばなりません。然るに本研究所の現在の機構は、この重大時局に即応する上に於て猶不備なる点あるが故に、ここに本研究所を先づ閉鎖し、体制を一新して更に一層大政翼賛の実を挙げんとするものであります。依てここに、その実行の一端として左の如き手続きを採ります。

(一)道徳科学研究所の閉鎖を致すとともに、所長、次長、理事、社会教育講師等の一切の名称は自然消滅致します。

色々御苦勞願いました事を厚く御礼申し上げます。何卒皆様方各個の立場々々に於て臣道実践、職域奉公に御努力を御願ひ申上ます。

但し道徳科学専攻塾の教育は、本科、別科共に従来の通りで何等の変わりもありません。本科生諸君は只管勉強して、学生の本務を尚一層尽されむ事を希望致します。(二)此際、国防献金として陸軍に拾万円、海軍に拾万円、計貳拾万円を道徳科学研究所の名を以て寄附致す事と致します。

(三)谷川温泉の御利用を当局に御相談申し上げるつもりであります。

猶、今後の方針については、よくよく皆様方の御懇談を御願ひ致したいと存じます。

昭和一六年二月八日

この時一九才に達していた先生のご長男、後の三代目所長となる千太郎先生は父君の苦闘のさまをじっと見つめていた。述懐して次のように語っている。「思い起こすと父の生涯は、苦難とそれに対処する努力、節制の連続でした。若い頃のそれは知る術がありませんが、私の経験で覚えておくことは、何といっても昭和一六年二月の団体の解散であったようです。概して自分の立場や考え方を積極的に説明しない性格であっ

た父が、当時一部人士の策動に乗ぜられて孤立無援、独り神と教えを信じ、亡祖父の魂を念じて頑張りぬいた苦悩は察するに思い余るものがあります。」<sup>(23)</sup>

また、ある卒業生が語るように、千英先生は「多くの門人が大政翼賛会に走った中で、博士の魂の抛り所であった道徳科学研究所を解消してまでも、時流におもねることを潔しとせず、最後まで軍国主義にくみしなかった」<sup>(24)</sup>のである。

敗戦後、昭和二十二年二月八日、先生は道徳科学研究所の復活を声明する。昭和二十二年財団法人道徳科学研究所が認可され、先生は理事長ならびに所長に就任、モラロジ―講習会は新しい日本の道徳的復興をめざして再び力強く全国に急速に浸透し始めたのである。私はこの年、昭和二十二年に中学生ではあったが、すでに旭川でモラロジ―の講話を聞いていた。

大勢にはよきものと、あしきものとあり

大勢に逆行または順応するものは滅ぶ

順応しつつ真理を守るものは残る

これは大正一一年頃と想定される千九郎博士の遺稿の中に発見された言葉である。実に万貫の重みをもつ言葉であり、また千英先生の生きざまをも貫く言葉である。

〔父が〕亡くなります前、三年半くらいの間におきましては、私の言うことにつきまして、〔父は〕十分これを

承認してくれるようになったわけでありませう。…そのこととは最高道徳というものにつきまして、私がだんだんわかってきたと、こう申すことができます。

先生は激動の時代に、この言葉の真実味を実証されていたのである。

〈注〉

- (1) 『追憶・廣池千英先生』（道徳科学研究所編、一九六九）（以下『追憶』）、一六一―一八頁。
- (2) 『廣池千英選集』（廣池学園事業部、一九七〇）（以下『選集』）、第一卷、一七六一―一七七頁。
- (3) 『追憶』、一四五―一四六頁。
- (4) 横山良吉『廣池千九郎先生小伝』（廣池学園事業部、一九七六）、一〇九―一四頁。
- (5) 『追憶』、二四―二五頁。
- (6) 『最近の社会運動』（労資協調会編、一九二九、一二月）から先生の執筆部分が『追憶』三頁に転載されているが、そこに後年私どもが馴染んだ、歴史的事実とその内に存在する因果関係の分析の手法とスタイルがよく現れている。
- (7) 『選集』、第四卷、一九―四二頁。
- (8) 『選集』、第一卷、一七七―一七八頁。
- (9) 『講座日本歴史』（歴史学研究会日本史研究会編、東京大学出版会、一九九二）、第十卷、二四七―二四八頁。

- (10) 『昭和十二年二月二三日国民精神総動員に付訓示』。これは昭和  
一三年に改定されて『国民精神総動員と最高道徳』（道徳科学研  
究所）となった。
- (11) 『講座日本歴史』、第十卷、二五八頁。
- (12) 『講座日本歴史』、第十卷、二五一—二五二頁。
- (13) 遺稿「近時における偏狭なる一派の日本人の誤想」（昭和十二年  
推定）および『追憶』、一四三—一四四頁。高 巖「日米関係と  
廣池千九郎の思想—日本の国際化と戦前の移民問題」、『モラロジ  
—研究』二五（一九八八・九）二三八—二三九頁参照。
- (14) 『追憶』、一九—二〇頁。
- (15) 『講座日本歴史』、第十卷、二〇頁、三〇頁参照。
- (16) 『選集』、第四卷、「道徳科学及び最高道徳の根本原理」（一九  
四〇、七月）

- (17) 『追憶』、一四三頁、一四七頁。
- (18) 『追憶』、一七四頁。
- (19) 『追憶』、一八二頁。
- (20) 『追憶』、二六四頁。大阪の研究者八名が先生に、モラロジ—団  
体が一時解散して時を待つ案を進言したことがあるが、それがこ  
の時の解消の決断と直接的にどのような関係があったのかは明ら  
かでない。
- (21) 『追憶』、一五七頁。
- (22) 『追憶』、一七九—一八一頁。
- (23) 『追憶』、二頁。
- (24) 『恩師廣池千英先生』（広池学園事業部、一九七二）、三五頁。

# 麗澤の人

外国語学部特任教授

池田

裕

人それぞれ「麗澤の人」となるのには、何らかの因縁によっていることはまちがいない。かく申す小生が「麗澤の人」になれたのには、不思議としか言えないような因縁によっていることをここにまず披露させていただきたい。

それは昭和十七年三月十八日にさかのぼることになる。この日の朝日新聞に「東亜専門学校」（現、麗澤大学）の生徒募集の広告が出たのである。その広告を見て応募し、入学したのが小生の兄である。

したがってモラロジのモの字も知らないで入学したということになる。

その兄が一学期が終って夏休みに帰省してきた時に、父親に「ただ今帰りました」とちゃんと正座し、両手をつけて挨拶したのにまず驚いた。そして、その翌朝、その兄が便所の

掃除をしたのにこれまた驚いた。驚いたのは小生だけではない。家中の者が「えッ兄ちゃんが便所の掃除をしている!!」と。

「麗澤の人」となった兄が、家中の者を驚かせるような、すばらしい学校が千葉にはあるのだ、ということをもつて紹介してみせた。

時代は変わり、軍国主義日本は滅び、デモクラシー日本に衣更えた。学校制度も六五三三制からいわゆる六三三四制に変わった。そこで昭和二十三年に、六三三制のあとの「三」の新制高校として道徳科学専攻塾高等部（昭和二十五年に麗澤高等学校と改称）が誕生した。この年には、旧中学三年修了者は右の一年生に、旧中学四年修了者は二年生に、旧中学五年卒業者は三年生にというように同時募集した。小生は、大

阪府立豊中学校四年を修了していたので二年生に編入したのである。ここで「麗澤の人」となる第一歩を踏み出した小生である。しかし考えてみれば、それをさかのぼること六年前の三月十八日の朝日新聞に掲載された東亜専門学校の生徒募集の広告をたまたま見つけた兄が、そこへ入学したのが縁となっているのである。

以来、今日まで数えてみれば四十余年間、碌々と麗澤の庭で祿を食んで来た。

「縁は異なるもの味なもの」とはまさにこのこと哉。

さて、前述した道徳科学専攻塾高等部に入學すべく常磐線北小金駅に降り立った時に、学生らしき人が、すうっと寄りそって来た。一瞬この人は何者か？と思った。すると「道徳科学専攻塾へ入學される人ですか」と声をかけられた。「そうです」と答へ終るか、終らないうちに小生が手にしている荷物を持つとうとしている。そしてあつという間に荷物は、リヤカーの上のせられていた。近頃のコンベアーよりももっともつとスムーズにことは運んでいった。

見も知らぬ人に手荷物を持っていかれたのである。一般常識から言うとは非常識きわまりないことである。まず「あなたはこの何者であるか」そして「何故に小生の手荷物をとるあげようとするのか」などを糺し、なおかつ「預り証」なる

ものを要求するのが常識である。

ところが、そんなことを小生に考えさせないような雰囲気がある。そこにはあった。それは一体、何なのだろうか。それはお前がぼんやりだから、と言われればそれまでかもしれない。

しかし、そうは言いきれない何かしら無言のうちに信用させるというか、安心させるというようなムードを持った学生さん達であった。これが最初に出会った「麗澤の人」である。残念ながらどのどなたか、全くわからない。

手荷物を託してしまったので身軽になって学校を目指して歩くこと約三〇分にして血流れ坂に達した。ゴルフ場の向う側の坂の名前が血流れ坂である。

そこで登りかけた時に、後からギーギーと軋み音を立てながら自転車がやって来た。ふりむくと旧陸軍の将校服（勿論、階級章はなかった）を着た偉丈夫が、そのギーギー自転車をこぎながら坂道を登ってくる。そして小生に追いつくや、「池田君ですね。待ってました」と声をかけて追い越して行ってしまった。

「誰？」何で名前を知っているのだろうか。これが二番めに会った「麗澤の人」である。この人が高柳次男先生であったのだ。

それから寮へ案内された。十一号舎二番室とのこと。室に

入って見たが誰もまだ到着していなかった。到着していたのは、一週間ほど前に鉄道便で発送しておいた布団やその外のものであった。

小生にはまだいささか不安があった。さつき北小金でリヤカーにのせられたあの手荷物はどうなっているだろうか。無事ここに届くだろうか。しかし、これは全く杞憂にすぎなかった。

四月二日が入学式だったと記憶している。

校長先生が壇上に登られた。第一印象は、小柄な人だなあ。告辞が始って驚いた。小柄なのに声は大きい。マイクなんてものはないのにあの大講堂いっぱい声は鳴りひびいた。

「一代の碩学、私の父廣池千九郎は万巻の書を読み、あらゆる難行苦行を重ね云々」で始まる名スピーチである。そして「そもそも教育とは、仁愛の精神を植えつけることである」と続き、「つまらぬ人間とじゃが芋は、集まれば集まるほど腐り易い」となり、終りに「この学校がいやな者は、今からでも遅くはないからさっさと辞めて帰りなさい。入学金・授業料など納めたものは全部返してあげるから」となった。

世界は広しと言えど、入学式において、いやなら辞めなさい、と言いきれる校長がどこにいるだろうか。このスピーチのパターンは、いくらか言辞に修正はあったが、主旨はずっ

と易<sup>かた</sup>らなかつた。

この方が二代め、廣池千英<sup>ちがき</sup>先生である。先生は園内にいらつしやる時は、和服、羽織、袴姿であった。それにまっ黒な眼鏡が印象的であった。

当時「校長先生は、生徒全員の顔と名前を御存じである」という噂が立っていた。入学式がすんで数日たった頃のこと。我々腕白ども数人が桜並木を歩いていると、向うから例の和服姿の校長先生が来られた。「こんにちは」と挨拶すると「いやーっ」と返事されて、「君は、加藤君だね。次は山脇君か。そして池田君だな」と、顔を見ながら次々に名前をおっしゃった。噂は噂ではなく、本当のことであった。

クラス担任は、大塚善次郎先生。英語の先生。初めてお宅へお邪魔した時に「池田君、君はえらくならんといかんよ」と<sup>おかがなま</sup>上方訛りでやさしくおっしゃった。この「えらくならんといかんよ」が、小生の頭に強烈にインプットされて今日<sup>こんにち</sup>に至っている。「えらくなる」とは一体、何をどうすることなのか。何がどうなることなのか。これは小生に与えられた禅の公案みたいで未だに解決していない。これからさきいつになったらこの公案に答えが出るかわからない。

何しろ高校生の小生にとって「えらくなれ」とは、ひょっとしたら「勉強しなさい」ということか、くらいに単純に思っ

ていた。が、そうはいかなかった。

ある時、病気で休んで寮で寝ていた。それは仮病だったかもしれない。と、そこへ大塚善次郎先生が見舞いに来てくださった。見舞いのお言葉をいただいて恐縮千萬なことであった。何しろ大したこともないのに欠席しているのだから。なに！そういうのは欠席とは言わないのだ。「サボリ」と言うのだ、くらいは百も承知の助である。

やがて先生が、「歌をうたってあげようか」とおっしゃった。一瞬わが耳を疑った。本当なら「先生、今、何とおっしゃいましたか」と聞き返したいくらいであった。生意気ざかりの高校生をつかまえて、しかもまちがいに学校をサボっている生徒に、「歌をうたってあげようか」とおっしゃる先生である。それは「ペチカ」であり、「この道はいつか来た道」であった。

ふまじめ人間である小生のことだから、ずいぶん授業はサボったものだが、このこと以来、大塚善次郎先生の授業だけはサボったことはない。

三年生になったばかりのことである。担任の大塚善次郎先生が、ホーム・ルームの時間に「新入生を迎えて、三年生としてこれからどういう心づかいで新入生に接していこうとするか。その抱負を一言ずつ言いなさい」

と、おっしゃった。みんなそれぞれいろんな抱負を述べた。その中の一人の男が、

「私は、新入生に対してはすべて『自己反省』することにしています」

と、とうとうやった。「おい、やるじゃない」「ほんまかいな」と外の面々は思っていた、と小生は思う。すると先生は、やおら「君は徹底した利己主義者である。自分だけ自己反省して、自分だけえらくなろうとしている」と、おっしゃった。一同ぎょっとした。これはきつい言葉であった。このことがあってから小生は『自己反省』という言葉を軽々に使えなくなった。

宗武志先生（たけゆき）に出会った。先生についてはいろんなバックがある。

元伯爵閣下、対馬藩の殿様、元貴族院議員などなど。対馬中学校から学習院高等科を経て、東京大学イギリス文学科を卒業しておられる。当時の斯界の大御所であった市川三喜教授の愛弟子であったと聞いている。また北原白秋に師事した詩人もあった。さらに絵画もよくされて、何度か個展も開いておられる。

先生は、たいへんな *chic* であった。ふだんは優しい温かい顔つきでいらっしやったが、何かお心の中にわだかまるこ



とがおありだったのか、時に、非常にこわい顔をなさっていることがあった。

そこが詩人であり、画家であり、芸術家らしいところである。二年生の二学期に微熱が出るようになり、帰省療養ということになってしまった。そしてその学期のほとんどを休んでしまった。三学期によく復帰したものの体力には全く自信を失ってしまい、日々ニヒルな思いで過ごしていた。

そんな時期のある朝、寮から学校へ行くこうとして歩いていたら、ひょっこり宗先生に出会った。「おはようございます」と挨拶したら「おはよう。身体の具合はどうですか」と尋ねてくださった。この「身体の具合はどうですか」の一言が、実に優しく小生の心にしみこんでいった。その声調と音量そして音質。これは科学的に何ホーンとかではとても計りきれないプラスαを含んだものである。このプラスαが一体何ものなのか。分析するのは野暮というものである。

このように優しい先生であったが、こわい先生でもあった。先生は、北原白秋の弟子であったので、小生は白秋の孫弟子であると自認しているが、当然のことながら誰も他認（こんな言葉はないが）してくれない。

ちなみに麗澤大学の校歌

太陽空に 懸り居て

萬の命 潤おせば  
聖は人の 世に出でて  
真の道を 伝えたり

ああ日日に 夜夜

麗澤の人

は、宗先生の作詩による。普通こういう時のサクシは「作詞」と書くのであるが、なぜか宗先生は、「作詩」を固執された。その理由はもはやお尋ねする由もない。

これは、現在、麗澤高等学校で第一校歌として歌っているとのことである。

ここで高柳次男先生に再登場をお願いする。

先生は、軍都金沢の近郊の出身で幼少の頃から軍人になることを唯一無二の途と心得ておられた。戦中なら当然のことである。

陸海軍の職業軍人養成学校を受験されたが、幸か不幸か失敗。縁あって東亜専門学校の前身である所の道徳科学専攻塾（昭和十年創立）に入塾された。その当時の先生の心境は「陸士か、海兵を受験する予備校のつもりで入塾した」ということだった。

ある日。大講堂に本科生並に別科生（社会人コース）が集まり、そこで新入生が一人ひとり自己紹介をすることになっ

た。

当時十九歳の高柳青年。将来は軍人になって陸軍大臣になるのだ。と大まじめに、真剣に、憂国の士たらんと堂々と所信を述べた。ここからは、小生の解釈であるが、高柳青年は満場のわれんばかりの、鳴りやまぬ大拍手を心ひそかに期待していたのではなからうか。

ところがである。豈計らんや。堂内にうずまいたものは大爆笑、冷笑、嘲笑、蔑笑、であった。

もの心ついてから十九歳になる今日まで「軍人になる」と言って笑われたことなどたったの一度もなかった。常に「えらい!!」「しっかりやれ」と励まされ、賛えられて来た高柳青年には、この種々な「もの笑い」は、あまりにも苛酷にして冷酷なものであった。

そしてその場から「笑い」を背に受けながら脱兎のごとく退場した、と伺ったことがある。

それから更生殿（大講堂に向けて右側にある自省室）に籠って一晩中、坐り続け自問自答を夜明けまでやった。

やがて曙になるとともに高柳青年の心にも曙光が灯った。その足で直ちに麗澤館へと走り、塾長、廣也千英先生に面会を求めた。塾長は寝巻き姿で玄闕に出て来られた。

ここでの二人の間に、どのような対話が交わされたかは詮

策する必要はない。ただ言えることは、以来高柳先生は職業軍人になるという希望をすっかり、きれいに捨て去ってしまった、ということである。

当時のことであるから、当然、兵役にもつかれたし、幹部候補生になり将校にもなっておられるが、あくまでもノンプロ軍人であった。

戦後は、英語の先生になっておられる。小生は英語を教わった。そして計らずも小生が麗澤高校の教員の末席を汚した時の主事であった。

以上の外にもまだまだたくさん「麗澤の人」を御披露させていたただかなければならないが、今回はこの辺でそろそろ擱筆の機が来たように思う。

なお、このような「麗澤の人」たちによって育てられ、羽ぐくまれた「麗澤の人」が大勢いることも忘れてはならない。その中には「出藍の誉れ」もいれば「不肖の弟子」もいることは否めない。その不肖の弟子の最たる小生がこんな筆を執らせていただく光栄を感じるとともに恐惶謹言。恐れ入る次第である。

# 美わしく悠久なるかな 麗澤の園

麗澤会第一八期生 秋葉 佳伸

「新入生諸君おめでとう。」

本学は、一世の碩学であり大学者であり、そうして大思想家であり、さらに七十三年の生涯を、聖者のような生活をもって終りましたところの私は父廣池千九郎が、東西の聖賢の万巻の書を読み、万里の道を歩み、あらゆる難業苦行を積みまして樹立いたしましたところの道徳科学<sup>モラロジー</sup>という新しい学問を根幹といたしまして、昭和十年に設立されました道徳科学専攻塾の後身でございます。

そもそも教育というものは、学生、生徒諸君たちに対して、その心の中に『仁愛の精神』を植えつけてくる、こういうことが、私ども教育者としての最高の理想であります。これは、儒教―孔子の教えにおきましては、『仁』の実現が人間最高の理想であり、キリスト教におきましては、『愛』が最高の理想であります。また、仏教におきま

しては、『慈悲』という言葉を使っております。この仁愛の精神を諸君たちの精神の中に植えつけてくるということが、教育の最高の理想であります。そうしたその仁愛の精神の上に、現代の科学と知識と技術、こういうものを学び、習得することによって、初めて学問の光というものが出てまいりますのでございます。

本学の特徴は第一に『大義名文の教育』、第二に『出藍の教育』、第三は『全寮制度』と『神意実現の自治制』…。私は本日より諸君を紳士として扱います。第四に本学園は一つの家族のようになっていく。学長以下大勢の教職員すべての人が少しでもモラロジーを勉強し、自分の品性を完成しようとして努力している。』

これが廣池千英学長の熱烈なる気迫に迎えられた歓迎の辞であり、私共は短大第一八期生として入学いたしました。

約40年後の今でも印象に残っており、受験の教室での大塚善次郎教授の温かくふくよかなお声、満開の桜並木、谷川校外授業中の廣池千九郎先生、ご臨終のお部屋、温泉のぬくもり、甲良先生はじめとする歓迎ぶり。九月終戦後再開された『道徳科学の論文』講読の初日、冒頭の第二版自序文を音吐朗々と読了し一言の解説も加えられなかった宗武志学監、毎時間一礼してから教壇に上られた上田茂男先生、エマーソンを熱っぽく講義された桜井東樹先生、アニメルファームの割石虎男先生、シャーロックホームズの松浦興裕先生、古事記の浅野栄一郎先生、哲学の高橋武市先生、美学の大塚真三先生、英会話のトマス・ライエル先生、法学の三浦信吾先生等々きりがなくつづく。寮の生活や卒業後迄親の如くお世話になった御法川博先生と桑原忠行先生、課外にケインズの一般理論を紹介下さった小泉喜平先生と心暖まる夜食をご用意頂いた奥様。夜になると先輩や同僚と先生方のお宅へお邪魔しては食料不足の当時何かと食べさせて頂いた有難い夜の思いがよみがえります。何と親切な先生やご一家の皆さんであらうかと、若い胸にしみつゝ寮の部屋にもどるのです。それに運動会の最後のマラソンランナーと一緒に走る学長の姿と観衆の拍手。

教室や寮生活の他に忘れられないことは、図書館や事務

室の方々や廣池学園と一身体であるらしいモラロジ―研究所の先生や職員各位の暖かさである。若林施設課長さんや課員の方々、島田食堂課長さんや川島さん吉田さん等所属の方々、毎日ここに黙々と私達学生や高校生に接して下さるお姿には、若い私にも、この方々には何か計り難い尊いお気持ちをお持ちだなと感じさせられました。

まだ日々園内ですれちがう麗澤高校の高柳主事先生はじめ松本直義先生、堀部房雄先生、大沢俊夫先生、椿原三郎先生にはいつも暖かくご挨拶を返えして下さいます。

この様な雰囲気の中、学園の大きな家族の一員として迎えられ、育ぐぐまれ、一年たつと私も新入生を迎える一人になっておりました。カーンという鐘の音に目ざめ夕方方の音に一日一日が暮れてゆきました。

二年目の夏、北海道旅行がありました。初めての土地で素晴らしい旅でしたが、その中で不思議であり感銘したことは、青森と函館と小樽と旭川と札幌等で、いわゆるモラロジアンが何人かで、またはたった一人で私達一行を熱心にお世話して下さいました。美しい摩周湖を見、美しい幌峠を過ぎて汽車の旅となり、とある淋しい山の中の無人の駅に停車すると、新鮮な牛乳の差し入れがあったことが忘れられません。現在は既に他界された方も多いかと思

ますが、そのご至誠に感謝しご冥福とご一家の御多幸をお祈りし、自分の努力をお誓いいたす次第です。

昭和三年三月卒業式における廣池千英学長告辞の最後は、<sup>はげ</sup>餞の言葉として、

「第一に神を信ぜよ。すべからく諸君たちは、天地の法則をよく認め、原因結果の法則をしっかりとお腹の中に入れて、真に神に恥じないところの行動をすることが第一に必要なことであります。第二には、自己を信ぜよ。第三にはいっそう至誠慈悲の精神を函養せよ。人のいやがる仕事を、みずから進んでやるのだという気持をもってやっていってほしい。世間には無責任時代とか言って自分のことだけしか考えない人間がたくさんいます。それだからなおいっそう、諸君たちが少しでも、人のしたがるにない仕事、いやがる仕事をすゝんでやるということになってくるとするならば、諸君たちの前途は明るい光明に輝いているものであります。第四に感謝報恩の気持を持つことが大切だということでもあります。お互い社会に出てまいりますと、いろいろな恩人をもってまいります。神の恩、国家生活の恩、精神生活の恩など、あらゆる方面におきまして恩を受けるのであります。したがって、これらの恩人に感謝報恩の誠を捧げて、はじめて独立自由人だということがいえる

のであります。そうでない人はなにかしら社会の大勢の人から借金を背負っている人間であります。この独立自由人になっていかなければ人間として恥じない、悔いのない人生をおくるわけにはいかなのであります。第五に強固な意志をもちたまえ。第六には大和魂を持ったところの国際的日本人になれ。第七には母校を誇れ。日本に学校の数は多いが仁愛の精神を人心に植えつけないという精神に燃えている学園は少い。第八には雄渾な夢を持ちたまえ。最後第九には日本一の門番になれ。仕事は何をやってもかまいません。しかしその職業の中でもっともすぐれた人間だということになれば意義がありません。そして最後に重ねて「諸君いつでも遠大雄渾な理想を常に持つていただきたい。これからの日本は、オレ達の双肩にあるのだ、こういう気持で大いに苦勞したまえ。そうして一歩一歩堅実な歩みを踏んでまいります。ベストを尽くして、それで困ったらいつでも私のところへ飛んでやって来たまえ」と結びました。三月に卒業して五月、私は家業の不振に困り先生のところへ伺いました。在学中の生意気な私に対し先生は静かに暖かい眼ざしで、励ますように諄々とお教え下されました。

翌早朝、問屋の重役さんを探るべく先生のお住いである

麗澤館の前を通りすぎようとして立ち止り、昨日の礼にと頭を下げた時、こんな人が今迄あっただろうか、親以上の人である。真暗な自分の足元を後から照らして頂きつつ歩き始めた自分。あつ、これがモラロジにいう慈悲か、この世には慈悲があるのだ、自分はその慈悲にふれたのだ。キリストも現実におられたにちがいない、何とありがたいことか。何とありがたいことか。何とすばらしいことか。どうして先生はあの様な方になられたのか。お父上の廣池九郎先生も慈悲の人であったという。二代続けて……とはモラロジ（道徳科学）の故にちがいない。私もモラロジを勉強させて頂こうと決心いたしました。絶望の私に生きる力が呼び起こされました。人生の真の意義を初めて知らせて頂きました。

その後はモラロジの各講座を受け、また地方の勉強会にて学び、行事に奉仕し、自分の心の修業と御恩返しの一環ということで励ませて頂きつつ早や三八年目となります。研究の初期除々に解ってきましたことは、自分はせいっぱい真面目に正直に努力しているが、いわゆる聖人の心に貫する至誠慈悲の心になるどころか、恩人に感謝報恩の念ももうすく、思いやりの心も乏しい自己中心的な人間であるということでした。この点を父にお詫びするようになって初めて家業も自然に回復し、母の顔に安心の色がみえてきました。

在学中は麗澤の園で、卒業しては生涯学習の場で、祖母や両親と研修し、至誠慈悲の経済人にと志して今日に至り、お蔭を以つてまことに小規模ながらよき従業員と秀れた仕入先・得意先に恵まれ、麗大卒の長男夫婦共々勤めさせて頂いております。『中庸』第二十六章に「故に至誠は息むこと無し。息まざれば則ち久し。久しければ則ち微あり。微あれば則ち悠遠なり。悠遠なれば即ち博厚なり。博厚なれば則ち高明なり。博厚は物を載する所以なり。高明は物を覆ふ所以なり。悠久は物を成す所以なり。博厚は地に配す、高明は天に配す、悠久は彊なし、此くの如き者は見ざざれども章る、動かざれども変ず、為すこと無けれども成る、天地の道は一言にして尽す可し、其の物たること貳つならざるときは則ち其物を生ずることは測られず。」とあります。

まさに三〇年前私共在学中の様子と今日の麗澤大学の姿は、この『中庸』の文言を実証されているように実感されるのです。そしてこの精神は、今後の政治・経済・教育・法律・家庭等全ての人間生活を改善する基礎となつて、世界に拡がり、実践されてゆくものと確信いたします。改めて歴代学長、教職員の皆様と関係各位に深謝し麗澤の園に縁を頂いた私のお礼と致します。

# 人生にはだれでも

## 「その時」がある

国際経済学部教授 真野 義人

昨年十二月、NHKテレビの連続ドラマに、藤原周平・原作による時代劇「清左衛門残日録」というのがあった。藩公の江戸側用人（今でいうと秘書部長か）であった三屋清左衛門という武士が隠居して国許に帰るのだが、その老境の揺れをえぐった秀作である。主人公に扮した仲代達矢が語る「日残りテ昏ルルニ未ダ遠シ」という言葉がずっしりとここにしみた。清左衛門は魚釣りなどして悠々と隠居生活を楽しむ一方で武芸の道場や学問所に通って心身の充実をはかるのだが、奇麗な料理屋の女主人に恋の埋れ火をかきたてられたり、二派に分かれて争う藩内の政治にまきこまれる。あくまで世捨て人に徹しようとしても、武士であり、過去の経歴からして公けの事柄にかかわらざるをえない哀愁が伝わってきた。人間はやはり社会的動物であって、

一人では生きられない。人とのかわりはついてまわる。「日残りて昏るるにまだ遠し」という感慨は、私にとって、そのドラマ放映に先立つ入院生活における偽わらざる実感であった。何をいさら、といわれるかもしれないが、病気をしてみると人間の生命というものを思わざるをえない。これまで丈夫で健康であっただけになおさらであった。私は、八月の初めから九月の下旬にかけて五十二日間にわたり、東京の国立国際医療センターに入院し、病人の気持ちを思い切り味わった。と同時に下界のこと、（というのは私の部屋が十六階の最上階にあつたせいでもあるが）しゃべりの世界を考える十分な時間をもつことができたのだ。最初のショックは、私の部屋のならびの部屋に、思いもかけず古くからの知り合いである経済評論家・天谷直弘氏が

入院しており、明日も知れぬ病状だと聞かされたことで、気が動転した。はじめは、ヘルニアの手術を受けたのであるが手術台に乗ってからも何ともしれぬ不安が襲ってきて、「ボクも死ぬかもしれないのか」などと口走っていた。

それからがまるで地獄であった。実はその七月下旬、バシコクで開催されたASEANの会議を取材したり、有識者とのインタビューをしたりして帰国したところ、もものつけ根に少しばかり出っばりを見つけたので、医者に相談した。そうしたところヘルニアと分かり、簡単な手術で、一週間そこで退院ができるのですぐ手術をしましょうということになった。ヘルニアの手術自体は、どんなことをするのか聞いてみると、素人にもそんなにむづかしいとは思えず、軽い気持ちで手術をうける気持ちになったのだが、前述のように知人の病状に動転したうえに、局部麻酔がうまくきかず、強烈な痛みになつたのである。執刀した外科の医長が気がついてすぐ麻酔部長をよび全身麻酔に切り換えたので助かったが、これが地獄のはじまりであった。しかし、もつとつらい思いをさせられたのはそのあとのこと、術後にまた予想されなかった高熱と激痛がやってきて、ベッドの上でのたうちまわった。局部麻酔の副作用である頭痛は間もなく去っていったが、胸や腹の痛みは

ギリギリと強くて痛み止めや下熱剤の注射もきかず、そのうえ激しい発汗で一時間おきに浴衣の寝巻きを代えなければならぬといった状態が続いた。

うんうんうなっていた、といえぼそんなことだろうが、いいあらわせない辛さがあった。心配した医者たちが病因をつきとめようと「できるだけの検査」を受けるようすすめるので、うなづかざるをえなかった。ところが検査も手術におとらずつらいものだと、頭では知っていても実際にうけてみるのとは大違いだ。超音波やレントゲンの検査などは苦痛はないのだが、身体のあちこちからパイプを入れられた時の思いは筆舌にくしがたい。結局、胆のう炎であることが判かり、胆のうの中に泥状の液がたまつて小さい石がいくつかあるので胆のう全部を取り除くしかないと診断された。それまで私には症状の自覚はなかったのだが、胆のうの機能（胆汁の濃度を圧縮して食物に応じて十二指腸に送り出す作用）がすでに失なわれており、手術で体力が弱つたのを機会に炎症が起きたらしい、ということであった。

ところが、この胆のうの摘出にはまず炎症をおさえる必要があり、このため飲まず食わずで点滴で栄養をとる、ということと何と二十日間も点滴を受ける破目になった。この点滴というのは静脈に針をさして栄養を流し込むので血



管が疲労してくると、これがまた痛いのである。そこで新しい血管を探して針をさすのだが、無器用で馴れていない人にはうまくやれない。あちこちにブスブス針をさすので、こらえきれない痛みとなり、こどものころに、熊んばちに刺された記憶がよみがえった。毎朝、採血にやってくる医者の名をドラキュラ、点滴のために針を指す医者の名を熊んばちとあだなをつけてからかつては、気をまぎらせていた。

さて、この胆のう摘出手術は、ほとんど傷跡を残さず術後の回復も早い、というので流行の内視鏡を使う新しい手術法も考慮されたが、私の場合は患部にゆ着があつて万全を期しがたいと診断されて、伝統的な方法が使われた。幸いなことに外科医長は、胆のう手術のベテランで、病院自体も三千という症例をもつていたため、安心して手術が受けられた。術後もまた十六日間という点滴生活を余儀なくされたが、外科の回復は早い、といわれるだけにまことに快調にリハビリにはいることができた。天谷氏は、この二回目の手術を受ける前に亡くなったが、私の場合は本当に幸運であつた、というほかはない。この時になって初めて「お医者様の手は神様の手」ということわざどおりの実感を覚えた。徹底した検査で、年輩者特有の病気もなく、ま

た不治とされる病気も発見されず、これも幸運であつたと思つている。ただ身にしてみても感ずるのは、病気をあなどつてはいけないこと、楽な手術などはないということ、それに、医者や看護婦は神様の手をもつていること、ということである。医者や看護婦、あるいは病院当局者のビヘイビアについては、とかく批判があるのだが、それは一部の私たちの品格にかかわるもので、大多数の人々も同様であると勝手にきめつけられては不当だ、と考えるものの一とありである。患者の身体ばかりでなく、こころのひだまで行き届いた親身になつた治療と看護を受けたことに感謝せざるをえない。

しかし、今回の地獄からの生還に当たり、何といつてもいちばん重みのあると確信するにいたつたことは、「その時」には自分で自分をどう処理するかを決定しなければならぬ、ということだ。「その時」とは、まず第一に、もしかして「生きる日が残っていないかもしれない」と思う時。第二に、「生きる日がまだ残っている」と判つた時である。いずれも自分ひとりでは考えねばならないが、自分をどうしたらよいかについては、ひとりひとり違うので一般原則化はむずかしい。それぞれ人間の個性を形式する遺伝子(DNA)の集合については、全く同一のものが

ないためでもあり、生まれた時から今日までの過去の経歴も社会とのかかわりもちがうためでもある。似た経歴の人があって参考にもなることはあろうが、自分は自分だけの処理をする覚悟が必要だ。そこに人間としての個の尊厳があるといっても過言ではなからう。私にとって今は、この第二の選択の時で、「昏るるにまだ遠し」という残された時間をどうするか、迫まられている。私の退院に当たって、生命の恩人である外科医長は、あれこれと退院後の養生についてのアドバイスをしたあと、「結局は私もあなたもそうですが、あと二十年も三十年も生きられるとは限らないわけで、好きなことをして短かくすぞすか、節制して長く生きるか、それぞれの考え次第でしょう」と淡々と感想を述べた。こういうことを書くと、そこまで医者がいるのは余計なことだと批判する人もあろうが、私は素直に受け入れることができ、その気持ちがありがたく感じられた。

「その時」は、しかし病氣した時だけにやってくるというわけではない。人生には節目があって、それが「その時」であって、気がついて適切な処置をとる人もあれば、気がついてでも放置しておく人もある。なかには全く気がつかず、あとになって「これが自分の運命なんだ」と勝手に解釈を

する人もある。「その時」に自分で判断してけじめをつける行動に移ることが大切であることは人生の成功者の生き方を見れば良くわかることである。私の友人でアメリカに住んでいる地質学者の場合なのだが、人生は自分で設計すべきものだと実践している人がいる。つまり「その時」が訪れる時を待っているのではなく「その時」も自分で設定してきた。彼の場合は、地質学の研究を一貫したベースとしたうえに、十年ごとに仕事を変えている。フランスのグルノブルで理学博士を取得後、まずメジャーの石油会社の技師となり石油の探鉱のノウハウを実際に学び、ついで独立してベンチャー・キャピタルを集めて探鉱事業を始めた。そのうちに商品相場に目をつけて手広く商売を行なうようになったかと思っていたら、こんどは地球文明の根源の研究を始めて、今は多くの著書を出版したり講演をしている。自由奔放な人柄と鋭い頭脳がその生き方を裏づけてはいるが、これはだれでもできることではない。でもそうした積極的に人生に挑戦する気持ちがあれば、大なり小なり彼のように人生を豊かにすることができる、と思うのである。

ただ、この友人も処世にあたっては、自分中心ではありながらも社会とのかかわりを大切にしていることを記して

おく必要がある。やはり昨年暮れのテレビドキュメントで、二十世紀におけるアメリカの成功者列伝の筆頭に挙げられている「ハワード・ヒューズの生涯」をみたが、自分の野望にかられて大成功はするものの挫折したあとの悲惨さにこころをうたれざるをえなかった。ハワード・ヒューズは、二十世紀のリーディング・インダストリーを次々と先取りして、石油・映画・航空機・ミサイルといった事業で大富豪となる一方で太平洋横断飛行で記録を作ったり、映画監督やテスト・パイロットもやるという多彩な生活をおくった。しかし彼は、自分以外のだれも信用せず、最初の妻と離婚したあとはずっと独身を続けて事業を拡大してゆくが、テス

ト飛行中の事故や航空会社の経営の失敗などが重なって、人嫌いになってしまい、人前に出なくなっただばかりか側近との接触も電話で指令をするようになる。最後はラスベガスの自分所有のホテルの、厚いカーテンで外部の光をさえぎった部屋にこもりきりになって死を迎えるのである。これも自分の対処の仕方であつたろうが、世間に背を向けたままの人生はやはり異常というほかはない。あくまで人生は自分の責任である。そして「その時」ごとに自分で処理していく必要がある。しかし社会とのかかわりを否定できないのである。

# いま哲学の意味するもの

国際経済学部教授 大島 末男

「いま哲学の意味するもの」という難解で重い課題を与えられて困惑していますが、現在、中学生の「いじめ」や自殺が社会問題となっている時、哲学にかけられた期待が並々ならぬものであることを感じます。「いじめ」や自殺は社会の影の部分に属する問題ですが、影には必ず光が伴います。例えば、異物の侵入を阻止する人体の反応の光の局面が免疫であるとすれば、影の局面はアレルギーという具合です。

光と影のあざやかな対照は、自然から文化への推移の時に見出されます。これは現在、神話という形式で伝えられています。神話は混沌から秩序を形成した英雄たちや神々について語っています。また人間を苦しめた荒々しい自

然を鎮めて、秩序ある世界を形成したことが、人間にとつて如何に貴かったかという事実は、折角、獲得した秩序ある世界から以前の無秩序の状態へ逆戻りすることを避けるために、英雄や神の行為が共同体の規範となった事実から伺えます。共同体の構成員となることは、自分の属する共同体を形成した英雄や神の生き方を規範として生きることを意味しました。さらに、神話が日本の神楽やギリシア悲劇のように祭日に上演されたことは、創始者である英雄の行為に感謝するとともに、英雄が苦勞して形成した共同体を、その規範に従って堅持することが、その構成員の根本的生き方であることを意味しました。したがって根源的なものに関わる学問である哲学と倫理学（道徳）と神学（宗教）は統合され、哲学は人格形成という意味をもっていたのです。

この事実を例証するために、周知の神話、須佐之男命による八岐の大蛇の退治の物語を考察してみましよう。八岐の大蛇は八本の尾、つまり多くの沢から水を集めて大河となり、河口で八つの頭すなわち多くの分流を形成して海へ沿う大河を象徴し、人身供養となる櫛名田姫は稲田を象徴します。しかも川が氾濫して稲を薙ぎ倒す事態は大蛇が通った跡に呼応しますので、大蛇の退治は荒れ狂う大河を鎮めて、農業を確立したことを意味します。次に大蛇の退治によって、その血によって川が赤く染ったという事態は出雲地方の川から砂鉄が取れたことを意味します。さらに一本の尾から天の叢雲の剣が見つかったという事実は、「たたら」製法によって、砂鉄から鉄を製成することが可能となったことを意味します。つまり八岐の大蛇の退治の神話は自然から文化への移行を指示します。

この事実は、大蛇がフロイトのリビドー（根源的欲望）、生命力の根源を象徴すると解釈すれば、さらに深い意味をもちます。八岐の大蛇の退治は、人間のリビドーを鎮めることを意味し、すべてを無化する非存在の脅威を克服し、存在の本質構造である社会秩序を形成することを意味します。それゆえ原始社会においては、社会規範を形成した神や英雄の行為を正確に繰り返すことが人間の生きる意味で

あり、生（存在）の根源的あり方に関する学問である哲学の意味だったのです。

しかしこの世では光は必ず影を落します。ルソーとマルクスは、小麦（農業）と鉄（工業）の発見は、人間の生活水準を向上させた反面、原始社会では平等であった人間の間地主と小作人、資本家と労働者の区別を生み出すメカニズムを指摘しました。人間の世界（実存）では光は影を伴い、新約聖書ヤコブ書一章一七節が語るような「転回の影のない先の根源」である神の世界（あるべき姿の本質の領域）とは異なります。今、社会問題となっている中学生の「いじめ」や自殺は、日本経済の高度成長を支えた競争社会が落した影の部分なのです。

## 二

八岐の大蛇、つまり時々荒れ狂って氾濫する大河は、人間の魂の奥深く巢喰っていて、時々心の平和を乱すリビドーに対応しますが、リビドーについては旧約聖書のアダムの墮落の神話が多くを語っています。またアダムとイヴを誘惑するサタンが蛇であることも象徴的です。神は、人間が知恵の木の実を食べると眼が開けて、人間が神と比肩するようになるのを恐れて、人間が知恵の木の実を食べるの

を禁じたのだと、蛇は狡猾うそかに嘯うそきます。蛇によって象徴される根源悪（原罪）は、人間が矯正したくとも矯正できない醜い性格、つまり妬みや憎悪や狡猾さを指示します。しかも人間の魂の奥深く巢喰うそつていて、時々意識の表層へ噴出してくる原罪が、時々氾濫する川と同様に、普段は地中深く蓄えられていて、時々地表に噴出し、地上の秩序を破壊する火山のマグマに喩たとえられるのも意味深いことです。

西洋哲学とキリスト教神学の歴史の中で、サタン（蛇）の解釈をめぐってプラトン哲学（古典的正統神学）とヘーゲル哲学（近代的自由神学）の区別が明確になります。正統神学とインド教は、それぞれ、楽園（エデンの園）をイデアの国（天国）と神の胎内と解釈しますが、両者とも「ありべき姿」の本質を意味します。したがって完全無欠な理想的成人であったアダムは、自由意志に基づく決断によって墮落し、エデンの園（本質領域）から追放された人間（実存）であると解釈されます。同様に蛇も墮落した光（Lux; luce）の天使ルシファー（暁の明星）と解釈されます。アダムは、墮落の結果、労働（labor）によって生活を支えねばなりませんし、イヴは子供を苦しんで出産（partus）しなければなりません。現代人の最大の関心事である労働（仕事）と性と死は、本質から実存への形而上学的転落の結果、こ

の世に這入ったのです。

プラトンとヘーゲルの中間に位置する中世の哲学者ボナヴェントゥラは、哲学の意味を「魂の神への遍歴の旅」と理解しました。ダンテの『神曲』もこのような現実理解に基づいています。同様にプラトンも、オルペウス神話に基づいて、墮落したために天国から追放された魂を知識によって救い、天国へ帰郷させることが哲学の意味（任務）であると理解しました。しかしプラトン哲学に基づくアウグスティヌスは、人間の魂は罪（リビドー）の重さに引かれて、独りでは天国へ帰還できず、神の恵みが必要とすると説きました。

ところがヘーゲルは、人間は神の助けを必要としない程度まで成熟したと理解します。ヘーゲルは、その『論理学』で現実の中核を本質と捉え、現実存在（Existenz）を本質から（*an*）出てくる（*stans*）ことと捉えました。しかも本質と実存（現実存在）の間には断層はなく、実存は本質（可能性）の現実化と理解されました。したがって楽園は夢みる少年時代、アダムの物語は青年時代を象徴し、墮落の結果、眼を開かれた人間は、成人として文化を形成するというように進化論的に解釈されます。ヘーゲルによれば、アダムの神話は、人間が自然を文化に高め、意識から自意

識を経て、絶対知に到達する過程を物語っています。ヘーゲルの『精神現象学』は、ボナヴェントウラの哲学と同様に「魂の神への遍歴の旅」と解釈することも出来ますが、ヘーゲル哲学の真の意味は人間の精神性の形成にあったのです。現在、「いじめ」の一要因として、画一教育の弊害が指摘されています。画一教育は森林の民である日本人に相応しく帰属意識（古典的思考）に基づき、異邦人や意見の異なる人間や「はみだし者」を排除し、近代人の特徴である自由意志に基づく個人意識に対抗します。カント哲学は個人の人格を強調しましたが、ヘーゲル哲学の核は民族精神だったので、単独者（実存）を強調した現代人であるキルケゴールによって批判されました。

それはともあれ、理性の勝利を確信したヘーゲルは、理性の光の到達しない生の深淵も、人間が自意識を回復し、自己の内面性へ帰還する時、理性の光の下に透明になると主張しました。これは人格の陶冶に基づくヒューマニズムと本質主義の勝利の宣言であり、近代哲学の意味だったのです。ここでも哲学は倫理学と統合されていたのです。ところがフロイトのリビドーやニーチェの力への意志は、ヘーゲルの説くように理性によって本質化される代物ではありません。この原罪、すなわち理性以前の根源的欲望の世

界を解明し克服する道を示すのが現代哲学の意味なのです。

### 三

いま中学生の「いじめ」と自殺が社会問題となつていますが、いじめられた経験のある者ほど弱者をいじめるといわれます。また「いじめ」の仲間に加わらないと自分もいじめられるので、「いじめ」の側にまわって弱者を攻撃するといわれますが、これがニーチェの「力への意志」の本質なのです。さらにアメリカで母親による幼児の虐待が社会問題となったことがあります。幼児期に虐待された経験のある親ほど自分の子供を虐待するといわれます。これはもう理性の力ではどうすることもできない理性以下、理性以前の問題としかいいようがありません。

日本に「虫」という言葉があります。「疝の虫」「夜泣きの虫」「浮気の虫」などといいます。蛇は長虫といいますが虫とは理性をもたない生命力、理性の力では処理できない根源的欲望を象徴します。このリビドーの世界こそ、覗き込むと眩い（めま）するとキルケゴールが語った無の深淵なのです。理性の象徴である大学教授でさえ、踊り子（アニマ）に無中になれば、顔が豚の顔に似てくるとユングは語っています。日本が地震を惹起する活断層を地下深く抱えているように、

人間は魂の奥深く原罪（リビドー）を抱えているのです。

さて「いじめ」が力への意志に根差しているように、自殺は「死への衝動」「死への本能」に基づいています。セネカによれば「死への根源的欲求」（Libido moriendi）という概念は、人間の歪曲された想像力が現実の姿を歪め、死への衝動を生む事態を指示します。空虚で無意味な人生に絶望しながら生きるよりも、自己の実存を放棄する方が楽であるとセネカは語りますが、人間は低次の有機体へ戻りたい根源的欲求をもつとフロイトは語ります。これが「死への衝動」です。フロイトによれば苛酷な現実に対して生きる代りに死を選ぶことは快樂原則に基づき、その究極の形が母の胎へ戻ることを願う涅槃原則です。しかしフロイトが厳しい現実に対して生き抜く現実原則を選ぶことを奨励するように、功利主義者ジョン・ステュアート・ミルも太った豚よりも痩せた人間の方がよく、太った患者よりも痩せたソクラテスの方がよいと説きました。ここに人間の尊厳があり、人間の陶冶を本質とする近代哲学、実践哲学の優位を説くカント哲学の意味があります。

私に与えられた課題は「いま哲学が意味するもの」です。それゆえ今迄語ったことを哲学的に、すなわち根源的、全体的、体系的に捉えて、この論文を結ぶことにしましょう。

現在、哲学が解決しなければならない「力への意志」やリビドーの問題は、人間の理性ではどうにもならない問題なので、現代哲学は理論（哲学）と実践（倫理学）を異った領域とみますが、ここに現代哲学の病根があることは明白です。それゆえ現代哲学の意味（課題）は、現在ばらばらになっている哲学、倫理、宗教の諸領域を再統合することなのでしょう。

後期シェリングによりますと、神の中にも怒りの神、妬む神、荒ぶる神と愛の神、平和の神、理性の神の区別があります。これはルターの祈りに答えず隠れている神と祈りに答えて自己を啓示する神の区別に呼応します。またこの対立は、人間存在の根底に潜んでいて人間を衝き動かし、翻弄するショーペンハウアーの盲目の意志、ニーチェの力への意志、フロイトのリビドーとそれを抑制する本質構造理性構造の対立に呼応します。この対立がシェリングでは第一勢位（Potenz）と第二勢位の対立、闇と光の対立となります。シェリングの「それに直面しては理性も沈黙せざるを得ないもの」（das Unvordenkliche）は根源的深淵であり、両勢位を自己の中に畳み込んでいます。この存在の闇夜（深淵）から朝日が昇って暗闇を克服するように、暗い原理を光の原理へ高め、最高勢位である精神性（靈性）へ到達するのが哲学と宗教の任務（意味）です。光の神は、



自己の中に神に反抗する自然(闇)を包み込んでいますが、この闇の克服が神の生命、神の歴史(救済史)であり、その例証がキリストの十字架による悪の力の克服です。

それゆえシェリングは、現在、社会問題となっている「いじめ」と自殺を克服する二つの道を指示します。第一の道は、理性(哲学)と道徳による実存の本質化の道です。「いじめ」は光の通らない暗闇の世界で猛威を振るうだけであり、理性に基づく公共の広場で白日の下に晒されれば解決します。歪んだ想像力の世界で、枯尾花も幽霊と見えるように、恐怖は倍加され、それに耐えられず、死を選ぶのが中学生の自殺のメカニズムなのです。それに対して理性に基づく哲学は、正しい現実の姿、真の現実を見抜く醒めた眼をもつことを意味します。また道徳の「徳」(Virtu)は卓越性を意味し、道徳とは人間の踏むべき道(行為)における卓越性を意味します。すでに言及したように自殺は快樂原則に基づいており、セネカも指摘するように快樂原則は生を腐敗させ、生の嫌悪へと導きます。経済学者ケインズもベンサムの功利主義を批判して、功利主義は資本主義の中心を腐敗させたと語ります。それゆえ現在、哲学が意味するものは、存在の本質構造(あるべき姿)を堅持し、安易な生き方に抵抗する勇氣ある生き方です。

第二の道は、理性以下、理性以前の「力への意志」やリビドーに対抗できるのは、可能性(本質)だけを語って、悪の力の前に沈黙せざるを得ない理論理性(消極哲学)ではなく、無力となった理性を超越した次元で死の力を実際に打ち砕いたキリストの恵み、神の愛(積極哲学)に自己を委ねて、生きる力を神から与えられることを祈る道です。これはルソーの一般意志(volonté general)を内包する生き方です。リビドーを完全に抑圧することは存在論的禁欲主義であり、生命力、やる気を喪失させます。したがってフロイトはリビドーを昇華させて、学問や仕事に集中する倫理的禁欲主義を説いたのです。

反面、いじめられる子供、そして自殺する子供の姿には、共同体の罪を荷って独り砂漠へ立ち去って行く贖罪の羊字架に架けられたイエスの姿が映し出されます。また地主の所有となった入会権の山の枯枝を背負って山を下って来たために罰せられた小作人の姿の中に、十字架を背負って市中を引き廻されたイエスの姿をみたのはマルクスですが、このイエスの死と復活こそ、悪の力を打ち砕いて闇を光に変えた出来事、理性の次元を越えるパラドックス(逆理)の出来事なのです。

# 廣池千九郎の中国観

外国語学部教授  
教務部長

欠端 實

## 一 中国観の形成

廣池の中国観は、明治三八（一九〇五）年、『東洋法制史序論』を刊行して、早稲田大学で東洋法制史の講義を担当する頃までにはほぼ完成されていたといえよう。それまでの経緯を述べておきたい。

彼の東洋法制史研究は、研究範囲として中国を中心に韓国、日本、モンゴル、ヴェトナム等を視野におさめていた。未完に終わったとはいえ、このような壮大な構想を描いていたのは、当初から比較法学的研究を志していたからであろうし、ヨーロッパの進出にもなつて時代状況がはじめて「東洋」の存在にたいする認識を一般化したためであろう。

研究開始の時期はかならずしも明瞭ではない。彼は穂積陳

重の論文に触発されて、明治二六、七年頃に『唐律疏議』をテキストにして日本と中国（唐）の古代の律の比較研究に着手したのがそのはじまりであるとしてよいであろう。

この研究は廣池が東洋法制史研究者として成長していく上での基盤を形成した研究であった。後に『倭漢比較律疏』（日本と中国の律疏の比較研究）として完成する。中国古代の律の研究が、なぜ日中の律の「比較」研究という形でまとめられたのだろうか。この疑問に答えているのが、研究着手にあたって述べたつぎの文章である。「唐代の制度の研究をしようとするならば、どうしても同時に日本古代の律令を読む必要がある。その日本古代の律令を読もうとするならば、どうしても日本と中国の律文の異同の比較をすることが重要である」と。ここには東洋（中国）法制史研究が、資料の残

され方の制約もあって、必然的に比較研究に進まなければならぬ理由が述べられている。

廣池の東洋法制史研究開始の直接の動機は穂積論文であった。やがて彼に師事して研究の大成を図ろうとする。研究方法においては穂積の影響を受けており、みずから「欧州における歴史法学家の研究法にならない……」と述べ、あるいは「小生はもと法理学の一分科たる歴史法学の専門家」とも述べているように、歴史法学派に属すると自認していたようである。同時に比較法学的方法によって、法の共通性を追及しようともしていた。

## 二 相通の理

人間事象に一貫した法則を見いだそうとするのは、廣池のものの方の一つの特色であった。たとえば若い頃に刊行した月刊誌『史学普及雑誌』は、「広く日本人一般の史学思想を養成」するとともに「人類の行跡には一定不動の法則あること」を知らせることを第一目的とした。

法則の追求は文法研究においても同様であった。「中国古文の構造上の法則を英文法の法則に依拠して、科学的に明らかにする漢文の構造について、系統的、学問的、技術的に説明……」と述べ、漢文法と英文法とを同一法則で説明しよ

うとしたり、あるいは、「本論文の目的は……日本文法の形と、印欧語文法の形とを、その大体において一致せしめ、学問上より言えば、東西別種の言語に相通の理あることを立証し……ウラルアルタイ系統の文法とある程度まで一致すること……」とあるように、日本語文法と英文法とを、同一原理で説明し得るものとみなしていることなどに、端的に表明されている。

東洋法制史研究においても、比較法学的方法を用いて、「相通の理」（共通する原理）を見いだそうとした。主要論著の結論部分において以下のように述べられている。

「予はしきりにこれに向かいて研鑽を重ねしに、はたして、シナ固有の親等制度は、純然たるローマ法の親等制度と同理にもとづき……」（『東洋法制史本論』）

「予は、朝鮮における親等制度が、全然ローマ民法のそれに一致するあることを論証して……」（同右）

「シナの法制を研究して得たところは、その立法の基礎的觀念が、やはりローマ法およびイギリス法などと同じく、正義にあることを明らかにしたということこれでありませう」（『道徳科学の論文』）

彼が東洋法制史研究においてめざしたものの一つが、東西の法の根底に共通するものを見いだそうとするところにあつ

たことが判明する。

### 三 民族固有の優秀な原素

比較することによって共通項とともに相違点も又明らかに  
なり、各国の法思想の特色も明瞭になる。各国の法がもつて  
いる固有の性格を明らかにすることもまた廣池の関心事であ  
った。それはただ単に学問的関心から生まれきたというだ  
けではなく、もっと広く、当時の時代認識から生み出された  
ものであった。廣池は述べている。

「けだし世界民族の消長を按ずるに、およそ、その民族  
固有の倫理想中、一種の優秀なる原素を含み、かつこれ  
を助長発達せしめてその民族共同生活の慣習もしくは法律  
の基礎となし得たるものは繁榮し、しからざるものは衰滅  
すること、ほとんど疑いなきものごとし」（『支那喪服制  
度の研究』）

と。東洋法制史研究は、廣池にとって、単に書齋における学  
問的研究にとどまるものではなかった。民族固有の倫理想  
や法思想のなから「一種の優秀なる原素」を抽出して、慣  
習や法律を基礎づけなおし、国民性の発展に寄与しなければ  
ならないと考えられていた。結果として、法制史研究には、  
西欧列強による植民地化の嵐のなかで、日本を、東洋を「衰

滅」の非運に陥ることのないようにすべき学問的責務が負わ  
されていた。（『清国調査旅行資料集』参照）

かくて法制史研究において廣池は、一方で東西両洋の法の  
根底にみいだされる共通した原理の探求に向かい、他方でそ  
れぞれの国の法の固有性の究明にむかった。そしてその兩者  
のなから、近代国家の建設にたいして、普遍的原理として  
提唱すべきものは何かを確定しようとしたものようである。

### 四 『東洋法制史序論』

廣池の法制史研究の最初の著作は『東洋法制史序論』（明  
治三八年、一九〇五年）である。本書はもっぱら「東洋にお  
ける法律という語の意義の研究」にあてられているが、内容  
は極めて多岐にわたり、中国古代の法制史、哲学史、宗教史  
であるといった、広汎な問題をその内容としたものとなった。

対象となっている「東洋」とは古代中国と日本両国である  
が、紙幅のほとんどすべてが古代中国に関する探求にあてら  
れており、日本語の「ノリ」の字義の検討に費やされた分量  
ははなはだ少なく、内容上も精彩を欠き、いかにもアンバラ  
ンスの観を免れがたい。

本書において廣池が得ることができた成果は二つあったと  
考えられる。一つは中国古代の立法の根本精神と考えられる

中正・平均の思想が善の根本実質であること。しかもこのことはひとり中国においてのみならず、広く人類社会においても普遍妥当性をもつものであると考えられた。二つには、中正・平均の思想と同一の根底を有する各種の思想、つまり公平、正義、平等、博愛、権利、平和ならびに人類無階級の思想等が、中国における政治・法律上の原動力となり、中国独自の国体を形成したということ。立法の根本理念の中に普遍性があることを見だし、その理念の現実的な展開の中に民族性を見いだしたということがいえよう。

これにたいして日本における法概念がもっている固有の性格、そこに見いだされる普遍性等については言及がない。広池の研究はこの時点でまだ日本に関しては研究が及んでいなかったことを物語るものであろう。それでも若干の比較が試みられている。それによれば、中国では、法律Ⅱ中正・平均Ⅱ善の実質Ⅱ天道、という図式として示すことができるのにたいして、日本においては、ノリⅡ主権者の命令Ⅱ一般法則、という図式となる。両国における法律という語の根本的な相違と、それにもかかわらず同一の結果がもたらされる理由が述べられている。この後、廣池はここに言う「主権者の命令」の内容解明に向かうこととなる。

## 五 国民性の改造

ところで各国における法理論の根底にある法思想の相違は何によってもたらされるのであろうか。それを廣池は「国体」の差によると考えた。すなわち「各国の法理論の基礎は、みなその国体のいかによって異なるを見るとき、わが東洋のごときも、日本といいシナといい、みな各国の固有せる国体にもとづいて法律を制定し認定し、運用せざるべからざる。ことはすでに瞭として明らかなること」としている。他方でまた、先にみたように、廣池は、法思想の現実的展開がその国の国体形成に影響するとも考えていた。したがって、結局、法思想とその国の国体とは相互に影響を及ぼしあいながら推移していくものである、とするのが廣池の考えであったといえるであろう。

学者としての廣池の究極的な関心は、各国の国体あるいは国民性の相違を、法のご概念規定や、その展開の過程をとおして実証しようとするところにあった。他方で経世家としての廣池は、国体とは国民の「信仰力」であるにとらえ、信仰力を変えることによって国体の改造も可能であると考えていた。

日本の国体の独自性と、そして普遍性とを解明することにたいしては若いころから強い関心をよせていた。たとえば『史

『学普及雑誌』刊行の辞にも、「時弊を救正しておおいに風教を振興し、もって国体を鞏固にし、かねて国光を發揚せんとするの微意をも存する」と述べられ、後年の国民教育へつらなる考えが表明されている。と同時に彼の東洋法制史研究が終局的には日本（法）研究に立ち戻るべき要因を、当初からはらんでいたことを示しているものであった。

『序論』において、中正・平均の思想は善の根本実質であるという理由から、広く人類社会において普遍妥当性をもつものとしての評価がなされた。彼のいう「一種の優秀な原素」を含んだものと考えられたからであろう。ただし「優秀な原素」を含んだ中正・平均の思想も、日本の国民教育の原理とするには、教育上において感化力に欠けると考えられたためであろうか、あまり強調されることはなかった。国民性の改造に強い関心を寄せていた廣池には中国の中正・平均の思想内容に満足しきれなかったようにみえる。そのためでもあろうか、これ以後、学問的関心を中国法から日本固有法に移していった。

## 六 アジア（中国）研究の意味

廣池にとり中国研究はいかなる意味をもっていたのであろうか。ヨーロッパ勢力の東洋進出にともなって、東洋諸国は

法制度のありかたに根本的動揺をきたし、繁栄と衰亡の岐路に立たされているという時代認識をもっていたこと、したがって法理研究は時代の急務と考えられ、法制史研究は実践的な課題を負わされていることを強く意識していた。このような時代認識に立っていたため、中国固有の法理の中からも、日本法の基礎づけに役立ち得るものがあるならば、これを採用しようとする進取的な態度が見られた。

法制史研究の成果は、まず『東洋法制史序論』として刊行されたが、結論として、両国の法理の差異、隔絶性を顕著に示すこととなり、東洋としての共通性はほとんどみいだされていない。中国固有の法理の内、普遍性あるものとして中正・平均の思想が抽出され、博愛ならびに権利の思想、人類無階級の思想等には評価が与えられていない。この弁別の際にはたらいしたのは、一つには近代的な各国の法思想の理解によって得られた価値判断であり、二つには、日本の国体にたいする強い関心が醸成した取捨選択眼であったと思われる。特に後者は、中国固有の法思想の理解にあたって批判的、拒絶的態度をとらせることとなった。

中国古代の法理の中にも日本法を基礎づける思想を見いだそうとする態度と、日本の国体の破壊に連なる思想はこれを拒絶しようとする態度、この両者を比較法的立場をもってバ

ランスを取ろうとしたとも考えることができよう。したがって他のアジアの国の法理の内からも評価すべきものを見いだすという公平な立場をとることができ、かつまた日本法の中から普遍性あるものを見いだそうとする場合にも、偏狭な国粹的立場に陥ることを避けようとしたといえよう。

結局、廣池の求めようとしたのは、広くは日本のみならず各国の国体を改造する際の基礎的原理、狭くは個々人の人格の改造に資する基礎的原理であり、彼の研究は、この基礎的な原理となり得るような普遍的な思想を確立するところへと収斂していったと考えられる。この内容は伊勢神宮と日本の国体との研究、日本憲法の研究を通じて明らかにされるのであるが、それは「慈悲寛大自己反省」という言葉に要約されるもので、宇宙自然の働きにのっとったものであって、人類にたいして普遍性をもつ内容であるとした。

## 七 今後に向けて

廣池の生きた時代から百年が経過しようとしている。アジアに対する見方もいくつかの点で改めることが必要であろう。

ヨーロッパ進出の余波の中に生まれた「東洋」。廣池はその東洋の一国としての日本が植民地化をまぬかれるために、法思想を通じて日本のアイデンティティを探り、生きる道を求

めようとした。そして近代国家形成に資するものであればアジア各国の法思想にも学ぼうとした。しかし、そこには近代化へのあまりに性急な要請があったために、文明から未開、野蛮にいたるランクづけを当然のこととして受け入れ、アジアの国々がもっている固有の文明に、じっくりと耳を傾ける余裕がなかった。ほどなくして日本に、近代化をなしとげたという意識が生まれて来るとともに、アジアを見る目もくもりだした。今、「近代化」そのものがトータルに検討できるようにになった。我々は、あらためて日本文化のアイデンティティのみならず、多くの国とその国を形成している民族の文化にたいして、平静なやわらかい心をもって、研究を開始していくべきではなからうか。

# 弱さの教育

## ― 建学の理念の授業報告 ―

外国語学部教授 水野治太郎

\* いじめの意味するもの

私は三・四年次生向けの専門コースゼミナール（比較文化）をもっているのですが、彼らに毎年のように、「あなたはこれまでの人生で最もつまかった時はどんな時でしたか」と尋ねることにしています。すると小学校・中学校時代にいじめにあったことをあげる学生が何人かいます。

また、一年次生・二年次生には、「あなたは誰かの臨終に立ち合ったことがありますか」という質問をぶつけます。平成六年度の一年次生一四〇名（総合科目「人間と社会」履修者）では、ほんの一〇名位が、祖父母等の死に立ち合った経験があると答えました。残りの一三〇名の学生は、人間の死を自分の目で見ていないということになります。この二つの質問は全く無関係に見えますが、共に生命に関わる問題です。

人間の死を直接経験していないということ、いじめの問題とはどこかで密接に関係あるように思います。

私たちの身近な環境から、人間の死という自然の出来事が隠されてしまいました。かわって最新の医療器具を満載した大病院が人間の生死を支配しています。それに対しては、延命という美名のもとに日常茶飯事として、過剰な操作が行なわれているのではという告発もあるぐらいです。他人の生命をいたずらに操作する技術文明国特有の科学主義的行為と、友人をいじめて死に追いやる冷酷な行為とは、どこか深いところで共通するものを感じとっているのは私一人ではないと思います。

子供たちがデパートで昆虫を買ってきて死んでしまうと「この昆虫の電池が切れたのでは」というのだそうです。本当にぞっとする話ではありませんか。肉親の死や可愛がっていた



犬や猫の死を現実に経験していない子供たちは、生命についていびつな感覚をもってこのような気がします。

このような時代の背景のなかで建学の理念を学生にどう伝えることができるのか。学生一人ひとりのところに、人間としての崇高な「愛」や「慈悲」の精神をどう培うことができるのでしょうか。そこで私自身が工夫している点は、弱さの教育ということです。日本中ががんばる教育を受けて、弱さをさらけ出すことを極端に嫌ったり、卑下したり、許容できない心の狭い人間になっていてのではないかと思えます。いじめもそういう体質と深くつながりがあるように思えます。そこで、弱さに光を当てる教育が求められると思えます。

弱い立場にたっている人々とは、ボケて人格崩壊している人、身障者等のハンディを背負っている人、死に直面している人々、さらには子供を育てた親の立場にたつ人も子供に対しては弱い立場にあります。子供の側の甘えを取りのぞくためには、その親の弱い立場を理解させることが大切だと考えます。私の指導目的は苦しみや弱さに共感する教育、慈悲（マイトリー・カルナー）のうち、とくに「悲」（カルナー）の教育を重視するものです。カルナーの原意はしみであり、あわれみを意味するといわれます。

#### \* 建学の理念の教育方法の変遷 — 総論から各論の時代へ

かつて建学の理念の授業といえば、全十冊からなる廣池千九郎著『道徳科学の論文』を全学生に購入させて四年間必修で、しかも単位を与えないやり方を採用した時代がありました。しかし、さまざまな意見が先生や学生から出て、概論風のテキストを使い二年間必修授業で単位を認定する方法に変わってきましたが、今日では二次にのみ必修で四単位を与える方式をとっています。

一学部時代には、卒業生の子弟や道徳科学の研究者の子女が多数派を占めていましたので、授業ははじめから終わりまで、廣池千九郎博士の説かれた道徳論を取り上げるだけで良かったのですが、学部増に定員増が加わり、大半の学生は専門教育を学ぶために入学しているため、授業内容にも方法にも従来の方針とは異なる、新たな工夫が要求されることになりました。

こうした授業の根幹をゆさぶる変化の内容を一言でいえば、「道徳科学の総論の時代」から「各論の時代へ」と表現することができると思います。現代の若者には、高邁な道徳論を総論風に展開する前に、まず現代社会がかかえる問題や課題を詳細に論じながら、高次の道徳原理の必要性を論じてゆく

方法です。

しかしながら、結論を急ぐといたずらに混乱を招き、取り上げたテーマが宙に浮いてしまい、結論として提示した理念が重みを失ってしまいます。また反対に、具体的なテーマに時間をかけすぎると、問題の所在は理解できたが、解決策として示した道徳原理と掛け離れてしまいます。しかも議論のすすめ方があまりにも知的にすぎると、精神的雰囲気を使い、単なる議論で終わってしまつて影響力がなくなつてしまいました。論理と精神とがマッチし、しかも若者に対して説得力ある仕方で授業をすすめるには、いくつかの技術が組合せられる必要があります。

そこで私は、映画やテレビをふんだんに使い、講義では理論をビデオ教材では感性を培うように組合せてすすめる授業を行なっています。それは学生には、のちにアンケートでみるように、かなり評価されているようです。

要するに、私の授業は、弱さの教育ともいえる、人間性に新たな光をあてることに留意する教育を行なうわけです。同僚の諸先生や学生たちから、よく質問をうけることですが、「麗澤大学では道徳教育を行なっているにもかかわらず、心身障害者や弱い人々への愛の精神が希薄のような気がするし、ボランティア活動も低調だと思つたのですが、何か理由がある

んでしょうか」と。確かに地元の福祉活動の関係者もそうみているようです。近隣の大学からは大勢のボランティア活動に参加しているが、麗澤大学の学生はいないという声もあります。(もつとも春休み中に、相当数の諸君が阪神大震災のボランティア活動に参加したことを聞いてうれしく思いました。)建学の教えのなかには、時代背景からくる内容が濃厚で、どうしても社会的な相互扶助の精神に弱さがみられます。その点を補うことにより、教えられている慈悲の精神が大いに生きてくるように思います。以下に昨年度の授業を履修した学生のアンケートを紹介しておきたいと思つています。人間の弱さを受容しようとする試みに強い共感を感じてくれているようです。

授業内容の一端をお伝えする意味で、学生の反応を紹介して、授業報告にかえたいと思つています。

「道徳科学の授業に対する学生の反応」(一九九四年度)

※数字は人数を示す

※クラス定員五二名中当日の出席者および回答者は四七名  
Q1. あなたは麗澤大学に入学する以前に「道徳科学」(モラロジー)についてどの程度知っていましたか。該当するものを一つだけ選んでください。

① よく知っていた	2	4・0%
② 少しは知っていた	9	19・1%
③ 全く知らなかった	36	76・6%

Q. 2. あなたはこのクラスで道徳科学を履修してきたわけですが、この授業に対する現在の感想は次のうちのどれですか。またその主たる理由を簡潔に述べてください。

① 大いに満足している	27	57・4%
② ほぼ満足している	20	42・6%
③ 普通だと思っている	0	0%
④ 少しは不満に思っている	0	0%
⑤ 大いに不満に思っている	0	0%

Q. 3. 各設問について、それぞれの選択肢のなから一つだけ選んでください。また、その理由を簡潔に述べてください。

① 大いに満足である	21	42・6%
② 満足である	23	44・7%
③ 普通である	3	6・4%

1. 講義内容については

④ 少し不満である	0	0%
⑤ 大いに不満である	0	0%

2. 授業の進め方については

① 大いに満足である	24	51・0%
② 満足である	11	23・4%
③ 普通である	11	23・4%
④ 少し不満である	1	2・0%
⑤ 大いに不満である	0	0%

3. この授業で学んだことが、あなたの現在の生活や将来の生活に

① 大いに役立つ	34	72・3%
② 少しは役立つ	13	27・7%
③ ほとんど役立つでない	0	0%

Q. 4. その他、道徳科学の授業全体に対する感想・意見・要望を自由に書いてください。

- ・ 授業に対しては満足である。誰も教えてくれない生き方・考え方を示唆してもらえて大いにプラスになった。
- ・ この授業を通じて人間にとって何が一番大切かなど、い

ろいろ考えることができた。

・ いままで学んだことのない分野なのでとても興味がもてた。人間理解について学べたことはこれからも大いに役立つと思う。

・ あまり出席できなかったことを深く反省しています。授業内容はたいへん良かったし著書も面白かった。

・ 身近な内容だったので興味がもてた。いつもあつという間に時間が過ぎてしまい物足りないくらいだった。

・ 自分の考えを改める機会を与えられた。道徳科学をもっと社会的に主張すべきである。

・ 父性・母性さらに生と死の問題はこれからの私の人生にとって役立つと思う。

・ 道徳というのは人間の内面に内在している原理だと思いが、時々目覚めさせる必要があると思った。

・ 人間形成を時間をかけて学ぶ機会はなかなかないが、私たちは麗澤大学で学べてラッキーだった。

・ 道徳教育の大切さを痛感した。義務教育でも広い視野のもとでしっかり教えるべきだ。

・ 他の授業などで忙殺されて人間性を喪失するなか、この授業では人間性を回復させてくれた。

・ 「相手の身になって考える」という言葉は自分のもつと

も欠けていた部分であった。

・ この大学ではモラロジという特別の授業があると聞いたので、入学するのをためらったが、考えが変わった。週2回の授業も楽しみであった。

編集 『麗澤教育』編集委員会

発行 麗澤大学

〒二七七

千葉県柏市光ケ丘二ノ一ノ一

電話 〇四七一一七三―三三七〇〇

印刷所 昌美印刷株式会社

東京都足立区綾瀬二ノ二六ノ七

電話 〇三―三三六九〇―三二九六

一九九五年四月一〇日発行